チャシコッ分布の一分析例

宇田川　　洋

1

近年，チャシコッ（chasi-kot）に関する研究が進展しつつあり，いくつかの仮説が立てられている。そのうち，形態分類に関する後藤秀彦氏の研究[1]は，なお検討を要するものの従来の河野広道氏[2]分類の型式を基礎に，14の細別型式を考えたものである。氏は言う。人間が一つの構築物を作ろうと考えるとき，「○○のために」という＜認識＞が基本となり，構築へのプロセスとして，「○○の目的を達成するため」に＜機能＞が考えられ，そして＜立地＞＜形態＞＜構造＞が決定づけられると。また＜機能＞から派生した＜形態＞と＜立地＞の相関関係が型式的把握と編年的把握の基礎となるともいわれる。これに＜構造＞を加えたチャシの形態構造学的研究として，後藤秀彦氏の橋状遺構を具備するチャシの研究[3]，同じく小山田真弓氏の研究[4]，後藤秀彦・石橋次雄氏の方形濠をもつチャシの研究[5]，宇田川洋の形態と伝承等からのチャシ編年の試案[6),7]等をあげることができる。また上野佳也氏の高地性立地という着眼点からの沖縄のグシクとの比較論[8]も提出されている。

このような方向とは別に，アイヌ語地名として残るチャシ地名の研究がある。[9),10),11]アイヌ語の解釈と位置比定の問題，アイヌ地名の変換等に問題点も残るが新しいチャシ研究の試みである。

また，チャシの立地とアイヌ・コタン（村落）の分布のしかたを比較するという方法も試みられている。本堂寿一氏の石狩川流域における研究[12]，宇田川洋の浜中町および天塩川筋における検討[13),14]があげられる。さらに考古学の立場からではないが，萩中美枝氏による yukar 等のアイヌ文学に登場するチャシの研究[15]も新しい試みとして始められつつある。それは，機能・構造・立地面においてチャシ研究に示唆するところがある。

以上，最近のチャシ研究の方向性を示すいくつかの方法論を示してみたが，ここ数年に至って始めて「チャシ学」とも呼べる体系ができあがりつつあるといえる。もちろん，これらの研究は河野常吉氏[16]以来の先人の業績の積重ねの上に立っているものである。これらの試論を補綴する意味でも，発掘調査による研究ももっと進められなければなるまい。

さて，筆者は以前に天塩川筋におけるチャシコッの分布について考えてみたことがあるが[17]，単にアイヌ・コタンの分布との比較に留まらず，アイヌの推定人口との関係にまで言及してみた。チ

第1表　領郡別のアイヌ人口とチャシ数（1983.1　現在）

国名	領郡名	年号	戸	口	チャシ数*			人口/チャシ数
渡島国	茅部郡	明治 1	77	315	0	0	0	
	爾志郡	〃	2	2	0	0	0	
	亀田郡				5	4	9	
	上磯郡				0	0	0	
	松前郡				0	1	1	
	桧山郡				1	0	1	
後志国	久遠領	文政 5	5	25	0	1	1	25.0
	太櫓領	〃	17	68	2	2	4	38.5
	瀬棚領	〃	19	86				
	島小牧領	文化 7		140	2	3	5	28.0
	寿都領	〃		73	1	0	1	297.0
	歌棄領	〃		224				
	磯谷後別領	〃		116	0	1	1	116.0
	岩内領	〃		339	2	0	2	169.5
	古宇領	〃		150	1	0	1	150.0
	積丹領	〃		92	0	5	5	32.6
	美国領	〃		71				
	古平領	〃		311	0	1	1	311.0
	上下余市領	〃		271	2	0	2	353.5
	忍路領	〃		255				
	高島領	〃		181				
	小樽内領	〃		178	3	0	3	59.3
石狩国	石狩領	文化7～安政5		3,895以上	0	1	1	3,895.0
	札幌区	明治 2	5	13	5	1	6	2.2
	上川郡	〃	13	105	9	4	13	8.1
	樺戸郡	〃	2	10	5	3	8	1.3
	雨龍郡	〃	2	11	8	1	9	1.2
	空知郡	〃	3	14	3	1	4	3.5
	夕張郡	〃	3	14	1	0	1	14.0
	厚田領	文化 7		82	1	0	1	82.0
	浜益領	〃		311	2	2	4	77.8
天塩国	増毛領	文政 5	85	437	1	1	2	218.5
	留萌領	〃	99	472	0	3	3	157.3
	苫前領	〃	48	211	0	3	3	70.3
	天塩領	〃	78	418	1	0	1	418.0
	上川郡	明治 2	3	14	4	3	7	2.0
	中川郡	〃	3	15	3	0	3	5.0
	焼尻	安政 5	10	43	0	0	0	
北見国	宗谷領	文政 5	149	719	7	5	12	59.9
	利尻領	〃	28	116	0	1	1	116.0
	礼文	安政 1	10	27	2	4	6	4.5
	枝幸郡	明治 2	18	70	4	3	7	10.0

チャシコッ分布の一分析例

国名	領郡名	年号	戸	口	チャシ数*			人口/チャシ数
	紋別	文政 5	282	1,136	12	7	19	59.8
	斜里領	〃	316	1,326	9	2	11	120.5
	網走郡	明治 5	83	339	9	6	15**	22.6
	常呂郡	〃	30	130	4	8	12	10.8
胆振国	山越内領	文化 6	105	520	1	0	1	520.0
	虻田領	〃	65	334	5	3	8	82.8
	有珠領	文化 3	78	328				
	室蘭領	安政 1	35	236	5	3	8	44.0
	絵鞆領	文化 3	25	116				
	幌別領	文化 6	40	192	1	0	1	192.0
	白老領	〃	82	357	4	0	4	89.3
	千歳郡	明治 2	39	223	9	2	11	20.3
	勇払領	文化 6	299	1,238	15	3	18	68.8
日高国	佐留領	文化 6	221	1,013	23	7	30	33.8
	新冠領	〃	76	339	2	0	2	169.5
	静内領	〃	120	554	17	0	17	32.6
	三石領	〃	60	271	3	1	4	67.8
	浦河領	文化 7	65	368	3	2	5	73.6
	様似領	〃	26	139	1	0	1	139.0
	幌泉領	文化 6	45	177	3	0	3	59.0
十勝国	十勝領	文化 6	254	1,034	12	0	12	86.2
	広尾郡	明治 2	11	69	0	3	3	23.0
	当縁郡	〃	4	15	6	0	6	2.5
	中川郡	〃	29	379	27	1	28	13.5
	河西郡	〃	9	134	3	1	4	33.5
	河東郡	〃	9	128	7	2	9	14.2
	上川郡	〃	5	51	1	1	2	25.5
釧路国	釧路領	文化 6	309	1,384	25	0	25	55.4
	厚岸領	〃	173	874	52	6	58	15.1
	白糠郡	明治 5	68	370	9	8	17	21.8
	川上郡	〃	38	202	29	3	32	6.3
	阿寒郡	〃	18	72	12	3	15	4.8
	足寄郡	〃	16	102	21	2	23	4.4
	網走郡	明治 11	18	94	6	11	17	5.5
根室国	根室郡	明治 5	27	101	41	9	50	2.0
	野付郡	〃	41	144	5	1	6	24.0
	標津郡	〃	25	113	19	1	20	5.7
	目梨郡	〃	31	118	11	0	11	10.7
計			3,856 以上	24,614 以上	487	150	637	38.6

* チャシ数は「実在のチャシ」,「カムイチャシ」, 小計の順で示してある。

** 美幌町・津別町のチャシは釧路国網走郡に入れる。

ャシと人口との相関関係を考えてみようとした新しいアプローチのひとつである。本論においては，この天塩川筋での分析方法を応用して，他の河川流域における場合を扱ってみたいと考える次第である。ひとつの地域的まとまりとチャシの分布についてアイヌ人口との関係から考察を加えようとするものである。筆者のいういわゆる「アイヌ考古学」の一試論である。

2

まず始めに，全道的なアイヌ人口とチャシの数との関係を「北海道旧土人戸口表」(『北海道志』巻1，開拓使編纂，明治17年序）を利用してまとめてみよう。第1表を参照していただきたい[18]。そこでは各領郡の戸口調査のもっとも古い年代のものをピックアップして示しておいた。表の最後欄に，人口/チャシ数，すなわち人口何人に対して1個のチャシがその地域に残っているかを計算してみた。仮に「チャシ人口」と呼んでおく。このチャシ人口をみるとばらつきが激しいことがわかる。そこでアイヌ人口が極端に集中している領郡ならびにそこにチャシが1個しか発見されていない場合を除外して整理してみると以下のようになる。

	口　数	チャシ数	チャシ人口		口　数	チャシ数	チャシ人口
渡島国	不　明			北見国	3,747	82	45.7
後志国	1,681人	21個	80.0人	日高国	2,722	61	44.6
石狩国	464	44	10.5	十勝国	1,810	64	28.3
天塩国	1,149	18	63.8	釧路国	3,098	187	16.6
胆振国	2,832	49	57.8	根室国	476	87	5.5
				計・平均	17,979人	613個	29.3人/1個

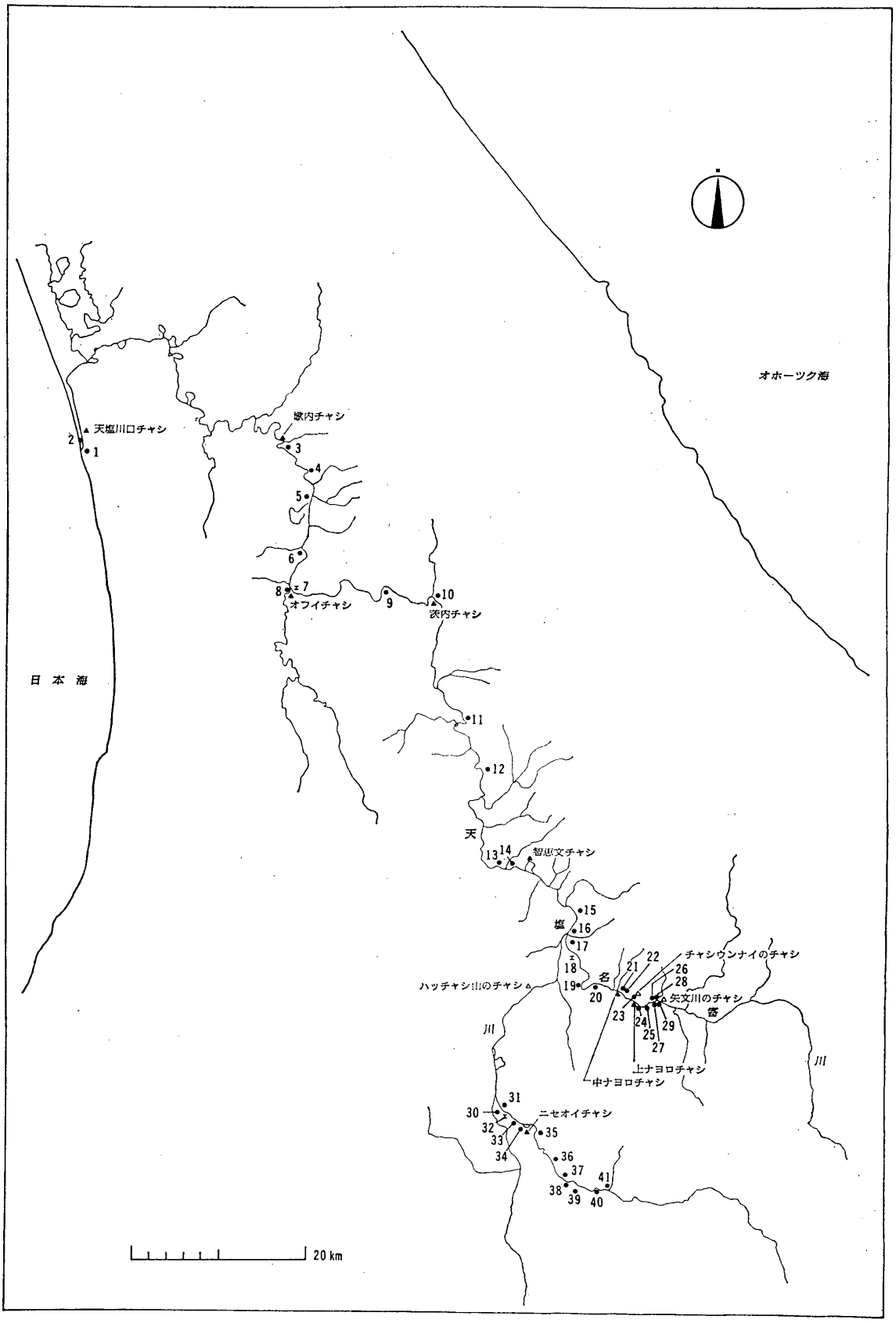
これを検討してみると，チャシ人口は1個当り約6人から80人の幅をもっている。さらに，北見・日高・十勝・釧路・根室国のチャシ数が61個以上の密度の高い場合をみると，11,853人，481個，24.6人/1個となり，約25人のチャシ人口が得られる。以上のように，全道的なアイヌ人口とチャシ数の関係から，チャシ分布の比較的に濃密な地域をみると，およそ25人から30人に1個の割合でチャシが残されているということが予測されるのである。また，チャシが少ない地域も加えた全道平均では，第1表のように約39人のチャシ人口であることから，約40人までを平均的数値とみることが許されるであろう。

なお，「北海道旧土人戸口表」の典拠は，明治年間は各支庁および本庁調となっており，文政5年（1822）『蝦夷雑書』，安政元年（1854）『安政元年巡見記』，文化7年（1810）『土人由来記』，文化3年（1806）・同6年（1809）『東夷竊々夜話』となっている。

では以下に，チャシ分布が比較的濃い地域について，川筋ごとの検討をしていくことにしよう。アイヌのコタンと戸口については，主に松浦武四郎の日誌類を利用することにしたい。

3

3—1　天塩川筋のチャシ



第1図　天塩川筋のチャシとコタン

第2表　天塩川筋のコタン

再航蝦夷日誌 丙午・弘化3・1846				天塩日誌 丁巳・安政4・1857				天之穂日誌 丁巳・安政4・1857				山川取調図	
		戸	口			戸	口			戸	口		口
1	テシホ	7→3	(15)					1	テシホ	14	61	1	テシホ
								2	トウブト	1	1	2	トウブト付近 (5)
				3	ベカンベトウブト	有りし(多)	(115)						
								4	ハンケナイブト	有りし(23)	(115)		
				5	テウトヒタラ	1	2	5	ヲウトヒタラ	出稼小屋2	(2)		
				6	トイノタフ	1	8	6	トイノタフ	1	8		
												7	サツコタン付近 (5)
				8	アベシナイ	3	8	8	アベシナイ	2	3	8	アヘシナイフト
9	ヲニサツペ	有		9	トンベツホ (ベンケヲニサツベ)	2	13	9	トンベツホ	2	10		
				10	ヲトイネフ	1	5	10	ヲトイ子フ	1	5	10	ヲトイ子フ
				11	ヲクルマトマナイ	1	12	11	ヲクルマトマナイ	1	12	11	ヲクルマトマナイ
								12	バンケニウブ	有りし(1)	(5)	12	ハンケニウフ
								13	ヘケルル	7	(35)		
14	ニコフ	有		14	ベンケニウフ	2	6	14	ヘンケニウボ	仮家	(5)		
15	ヘンベナイ	〃(1)	(5)										
								16	フシコベツ付近	有(1)	(5)		
				17	ナイブト（ナヨロブト）	2	8	17	ナイフト	有(1)	(5)		
												18	キナチヤウシナイ付近 (5)
				19	チルスシ	2	7	19	チルスシ	多→2	5		
								20	エサウシ	有りし(1)	(5)	20	エサウシ
				21	ベンケキユシヒタラ	1	9	21	ベンケキユシビタラ	1	7		

				22	チノミ	2	8	22	チノミ	1	8	
				23	カムイチヤシ	1	5	23	カムイチヤム	有りし(多)	(10)	
				24	トウシユマコマナイ	2	8					
								25	ヌタベト	2	6	
				26	シユヌフト	1	7					
								27	トウシチヤシ	有りし(1)	(5)	
								28	ケ子ンボ	〃 (1)	(5)	
								29	バンケヌカナン	〃 (1)	(5)	
				30	ケネフチ	1	9	30	リイチヤニ	1	6	30 リイヨウ付近
				31	ウツ	3	12	31	ウツ	5	(25)	
												32 ホロマクンベツ (5)
				33	クンカツテツクル	3	18	33	クンカツテツクル	2	14	
								34	ユツコヒウカ	有りし(多)	(10)	34 ユツコヒウカ
				35	サツテクベツ	3	10	35	サツテクベツ	3	10	
36	シベツケヌフ	有(1)	(5)									
37	シベツフニタエ	〃(1)	(5)									
								38	ハンケヌカナン	有りし(2)	(10)	
39	シホツノカナン	有(1)	(5)									
								40	カアナイ	有りし(1)	(5)	
41	ナエタエヘ	1	(5)									

「戸口表」の天塩国のうち，天塩川筋としては，天塩領・上川郡・中川郡が含まれている。そこのアイヌ人口は447人であり，チャシ数は11個がある。チャシ人口は40.6人で約41人となる。前回の検討の際には，弘化3年（1846）の丙午『再航蝦夷日誌』，安政4年（1857）の丁巳『天塩日誌』そして『東西蝦夷山川地理取調図』（以下略して山川取調図と記す）を利用したが，今回はこれに安政4年の丁巳『天之穂日誌』を加えておく（第1図・第2表）。

『再航蝦夷日誌』では，8コタンが記録されているが，戸口は不明である。『天塩日誌』の19コタンのうち戸口が判明しているのは18で，32戸・155人であり，1戸平均4.8人（約5人）となる。同日誌には別に，天塩川筋に270余人が山中に散落していると述べられていることから，3ベカンベトウブトの戸口不明のものは約115人余と考えることができる。1戸5人平均とすると約23戸となる。これは『天之穂日誌』の4ハンケナイブトの戸数と同じであり，“夷家多く有りし”とはこの23戸・115人を考えてよいであろう。

『天之穂日誌』で戸口が判明しているものの小計は34戸・156人で，1戸平均4.6人となる。約5人平均と考えて，第2表に示したカッコ内の推定口数を合計すると，67戸・408人となる。これには“夷家有”“有りし”と記録されたものも含んでいる。[19]

以上の他に『山川取調図』にみられる夷家の記号（エ印）のあるものは，他の日誌に登場しないものを1戸・5人としておく。そこで，各史料の各コタンの最大人口を累積すると，およそ605人となる。この川筋には，実在のチャシ8，カムイチャシ3の11個のチャシが認められており，チャシ人口は55人となる。『天塩日誌』の270人とした場合は，25人のチャシ人口，『天之穂日誌』408人では37.1人（約37人）であり，全道的な平均25～30～40人のチャシ人口に見合う数字である。

ところで，この天塩川筋におけるチャシの分布には“等距離性”が認められることを指摘しておいた。河口から川筋に沿って，約18～20km毎離れて点在するという基本形がみえるのである。ただし10地点のうち2地点にはチャシが未確認である。その2地点とは，天塩川口チャシ・歌内チャシ間，茨内チャシ・智恵文チャシ間である。他には基本的に1個のチャシが存在し，名寄川筋のみ中ナヨロチャシ付近に4個のチャシが集中して認められる。

3—2　渚滑川筋のチャシ

次に東廻りにオホーツク海側の川筋にチャシが点在する例を検討していくことにしよう。川筋に沿ってやや上流までチャシが分布するものを対象とするが，北からまず興部川があげられる。この場合はサッコッチャシが1個存在するのみである。川筋沿いに約35km上流に位置しており，河口部と中間部には未発見である。このサッコッチャシの特異性については前にも触れたところである[20]が，前出の名寄川の中ナヨロチャシ付近から川筋峠越えで約30kmの距離にある。コタンとの結びつきよりは，交通路上のチャシであると考えられる。

では渚滑川筋における場合はどうであろうか。渚滑川上流の一源流に札久留川（サクルー川）がある。山田秀三氏[21]は，このサクルーとはsak-ru（夏の道）と解釈し，天塩川の一源流のサックル

川と関連づけている。「この二つのサックル川を通って天塩の人達が北見の浜に往来したのであろう」という。ところがこのような明らかな交通路の要所にはまだチャシは未確認である。いずれ発見される可能性が高いことを示している。

ところで渚滑川筋には，その別の支流の立牛川沿いに最奥部のチャシ（中タツウシチャシ）が1個実在する。その地点は，河口部から川沿いに約30kmのところである。そして河口から20km地点に奥東のチャシが残されている。しかし10km地点では未確認である。河口部には濠の形状が不自然でチャシかどうか疑問が残るオムサロチャシが存在する。このように一応10kmという等距離性をみることができるわけである。

コタンの立地等はどうであろうか。『廻浦日記』には6コタン，『志与古津誌』には9コタンが第3表の如く記録されている。その分布は，1～8まで河口部に集中している。他の9～11の3コタンは点在しており，とくに最上流部のウェンコタンは中タツウシチャシよりも上流に位置している。それは峠越えすると現在の丸瀬布町市街地に行くことができる交通路上とも解釈することができる。中タツウシチャシもそのような性格を考えることができるといえよう。

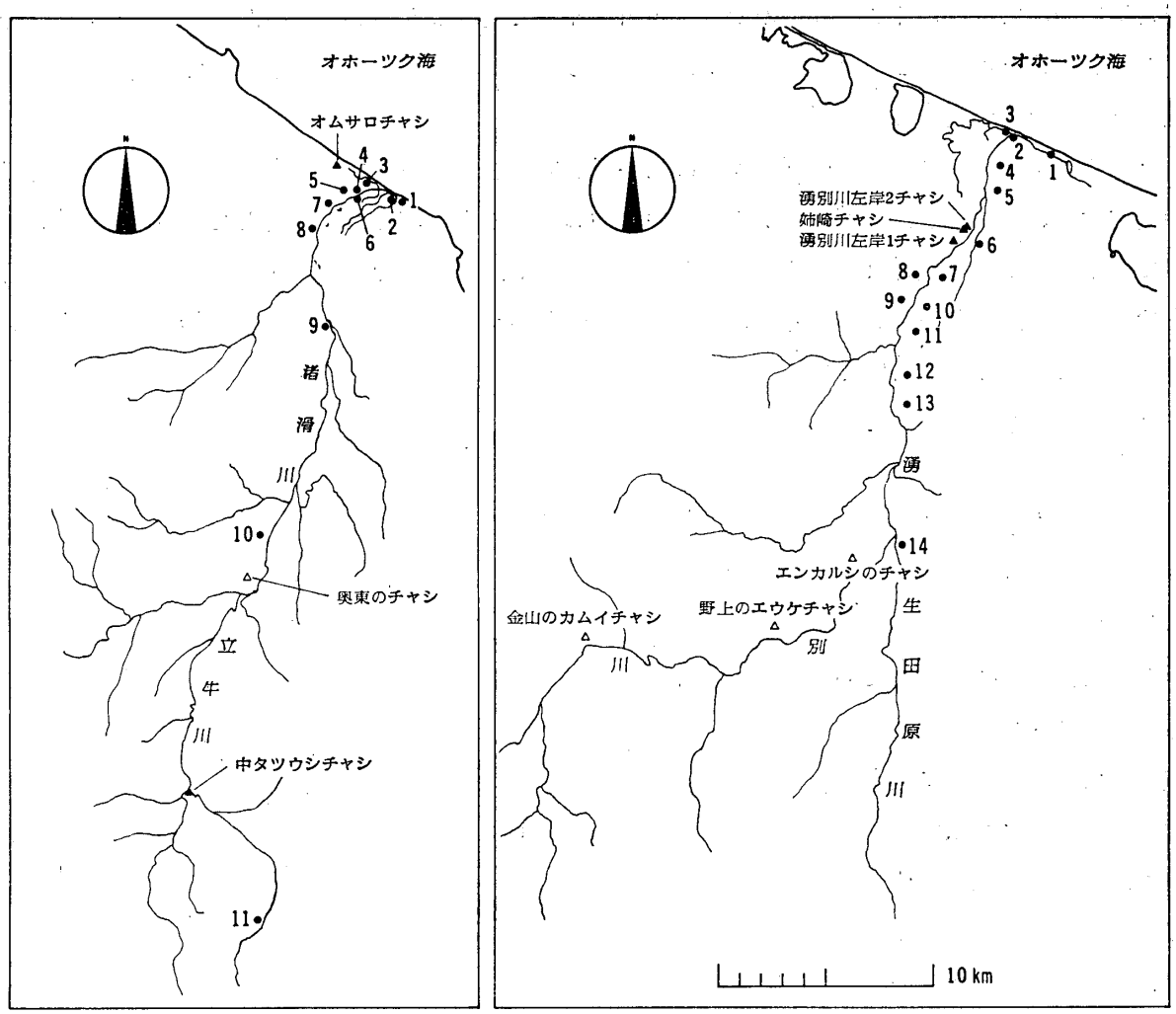
第3表　渚滑川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856				志与古津誌 戊午・安政5・1858			
			戸	口			戸	口
1	モヤサン	5→3	7					
2	シヨコツ	50→23	105	2	シヨコツ	3	12
3	ウレトイ	5	15	3	ウレトイ	3	7
4	ベツモシリ	1	3	4	ベツモシリ	1	7
				5	バラトウイトウ	2	9
				6	ホロヒタラ	2	8
				7	ウエンノツ	4	19
8	キナチヤシナイ	10余→1	4	8	キナチヤウシナイ	2	12
				9	シユマウニ	有りし(1)	(4)
				10	イチヤヌニ	〃 (1)	(4)
11	ウエンコタン	2	8				

『廻浦日記』に残る6コタンの戸口は，35戸・142人である。1戸平均4人。チャシは3個であり，チャシ人口は47.3人（約47人）となる。『志与古津誌』では1戸平均4人として，19戸以上・82人以上の戸口を推定できる。チャシ人口を27.3人以上つまり約28人と押えることができる。以上の2例を全道平均に比較すると，前者の約47人は少し多すぎるが，後者は平均値内の数字である。前者では2ショコツに50→23戸の戸数が集中し105人が在住したことが記録されている。これは強制コタンの性格を考えられるものであり，後者の分布を自然コタンとみなすことができる。チャシ人口も後者の28人が一般的なありかたを示している。

3—3　湧別川筋のチャシ

湧別川も渚滑川とほぼ同程度の規模の川である。最上流部のチャシは河口から川筋沿いにおよそ36km の距離にある。それは丸瀬布町金山のカムイチャシである。その地点は北西に峠越えすると前出の立牛川沿いのウェンコタンに通ずるという条件を備えている。中タツウシチャシとの関係も



第2図　渚滑川・湧別川筋のチャシとコタン

考えられるわけである。ウェンコタンまで15km前後，中タツウシチャシまで約22kmの距離であり，さほど遠くはない。交通路上のチャシと考えておこう。ただし，現在の交通路は別の2本である。1本は，金山のチャシから金八峠を越え鴻ノ舞を経て藻鼈川沿いに紋別市に出るルートである。その川筋にはコタンはあってもチャシは未確認である。他は，金山のチャシ付近の丸瀬布市街地から丸立峠を越えて立牛川沿いに通るルートであり，やはり中タツウシチャシを経由するものである。ともあれ，隣り合う渚滑川と湧別川を上流部において結ぶルートに，ともに最上流部の中タツウシチャシと金山のカムイチャシが立地しているという事実は注意されてよいであろう。

ではコタンとの関係をみていくことにしよう。『廻浦日記』と『由宇辺津誌』を参考にする。第2図・第4表を参照していただきたい。

コタンは14が記録されているが，現在の遠軽町より下流域に分布し，しかも比較的に等距離性を有している。実在のチャシは3個が近い位置にあるが，やや下流寄りで，河口から川筋に5，6kmである。姉崎チャシは古くから知られていたが，湧別川左岸1と2チャシは近年の発見であり，河口部とより上流域での発見の可能性が残っている。最上流域のコタンである14イタラブトより上流

には，実在のチャシは未確認であるが，カムイチャシに属するエンカルシのチャシ，野上のエウケチャシ，金山のカムイチャシの3個が存在する。このように，実在のチャシ，カムイチャシ，コタンの分布が分れているのはひとつの特色と考えてよい。

第4表　湧別川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856				由宇辺津誌 戊午・安政5・1858			
		戸	口			戸	口
1	フシコベツ	4	22	1	フシコベツ	3	13
				2	ブイタウシ	2	11
3	ユウヘツ	1	3	3	ユウベヲツ	6	14
				4	ヲヲアンナイ	有りし(1)	(4)
5	マクンベツ付近	7,8→11	50	5	マクンベツ	2	13
				6	トイカンベツ	多→ 2	15
7	クツチセンヘツ	7→ 4	20	7	クトチンベツ	6	20
8	フイタウシ	6→ 4	10				
9	サトメ	5→ 3	12	9	サトメ	2	5
				10	ヘツチヤロ	2	7
				11	サツベツ	1	4
				12	ヒユウコブツ	3	11
				13	ウベカリ	1	5
14	イタラ	10余→ 4	17	14	イタラブト	有りし(1)	(4)

さて，当川筋のコタンの戸口であるが，『廻浦日記』では7コタンで31戸・134人が記録されている。チャシ人口は22.3人（約22人）になる。13コタンが収録された『由宇辺津誌』の場合は，32戸以上・126人以上で，チャシ人口は21人以上となる。後者における1戸の推定口数4人は，前者の1戸平均4.3人を基準にしている。この両記録は2年の差の調査であるが，人口の減少がみられる。さらに『廻浦日記』をみると，5マクンベツ付近が7，8戸あったのが11戸に増加しているものを除いて，7クッチセンヘッ（7→4戸），8フイタウシ（6→4戸），9サトメ（5→3戸），14イタラ（10余→4戸）というように減少している。こうしてみると，チャシ人口が22人・21人以上と計算できたわけであるが，本来はもう少し多かったと推測することが可能である。全道平均値の低い方の値25～30人に近い数値を考えてよいであろう。ちなみに，5・7～9・14の安政3年以前の口数を1戸4人として推定して累積すると，169人となり，その場合のチャシ人口は28.2人（約28人）である。

3—4　常呂川筋のチャシ

常呂川は前出の湧別川よりは流域面積が大きい川であるが，実在のチャシ，カムイチャシともに3個ずつで計6個のチャシが存在するのである。湧別川筋と同数である。常呂川の最上流域のチャシは，北見市アイノナイチャシであるが，常呂川支流の無加川沿いに位置している。河口から川筋沿いに約60km弱の距離を有する。このチャシは，石北峠を越えて石狩国に至るルート上に存在するが，交通路上のものと考えると，その周辺の地形からみて，さらに上流にもチャシの立地条件を備える地形があることから，疑問が残るものである。あるいは未発見のものが存在するのであろうか。また，常呂川本流をさかのぼって置戸町から池北峠を越えて十勝国の陸別町に行くルートは，オホーツク海と太平洋を結ぶ重要ルートのひとつである。にもかかわらず，置戸町付近にはチャシ

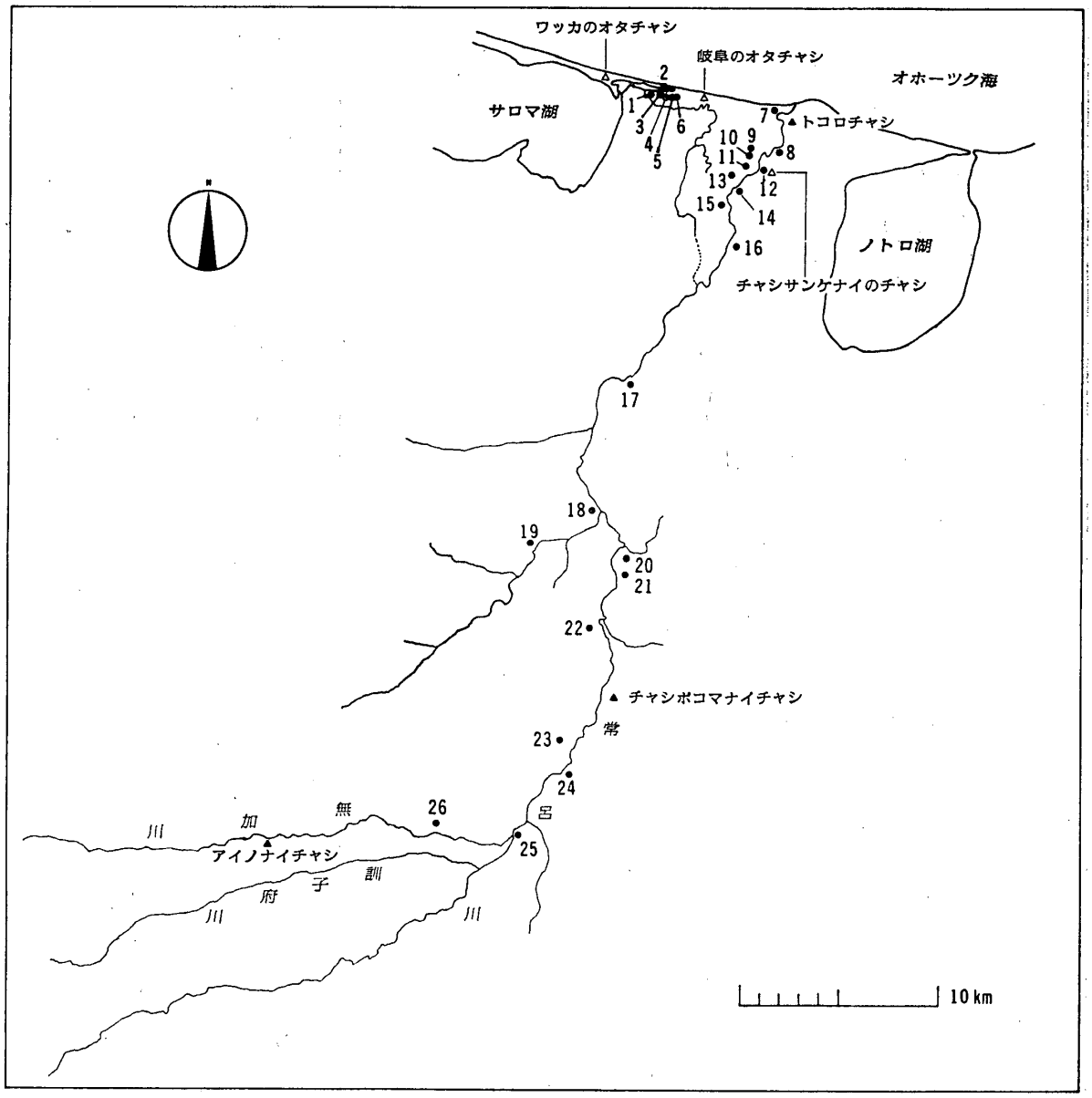
は存在しないようである。後でも触れるところであるが，陸別町におけるチャシの分布から考えて，このルートは重要な交通路と思われ，置戸町に未発見のチャシがある可能性が高いことを示している[22]。

第5表　常呂川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856				登宇武都誌・登古呂誌 戊午・安政5・1858			
		戸	口			戸	口
1	フルエサン	4→3	11				
2	トウブツ	6→2	9	2	トウブト	3	13
3	ウルカ	3→1	3				
4	トルハケ	10→5	31				
				5	トイルハ	3	16
				6	トイワウシ	2	9
7	トコロ	21→11	50	7	トコロ 東岸	2	8
					北番屋後方	8	35
				8	アネトイ	有りし(1)	(5)
				9	トウルツハ	〃 (1)	(5)
				10	シユブヌントウ	〃 (1)	(5)
				11	トイタコタン	〃 (1)	(5)
				12	チヤシサンケウシ	〃 (1)	(5)
				13	ニトシヨツハウシ	〃 (1)	(5)
				14	エフニイ	〃 (1)	(5)
				15	トカリヤニ	〃 (1)	(5)
				16	ヲベツカウシ	〃 (1)	(5)
17	フトエチヤンナイ	4→3	16	17	クトイチヤンナイ	3	17
				18	ニコロ	有りし(1)	(5)
				19	トイカ	〃 (1)	(5)
20	チアエウシ	6→4	26	20	チユウシ	5	30
				21	チルラトイ	有りし(1)	(5)
22	ヌツケシ	2,3→1	4	22	ヌツケシ	3	5
				23	ノヤサンヲマナイ	3	14
24	ムイコツネ	3→1	6				
				25	ヘテウコヒ	4	24
26	ムウカ	10余→1	8				

ではコタンの分布をみていこう。第5表と第3図を参照されたい。『廻浦日記』によるならば，10コタンが記録されている。32戸・164人（1戸平均約5人）である。この場合のチャシ人口は27.3人（約27人）である。次に『登宇武都誌』と『登古呂誌』に記録されたコタンをみると，22コタンがあげられる。ただしそのうちの12コタンは“有りし”である。これを1戸として，前の1戸平均5人を当てると，48戸・231人となる。チャシ人口は231人/6個＝38.5人つまり約39人となる。以上のチャシ人口27人と39人はいずれも全道平均値25～30～40人の範囲内に収まるものである。チャシとコタン分布の標準的な姿といえよう。

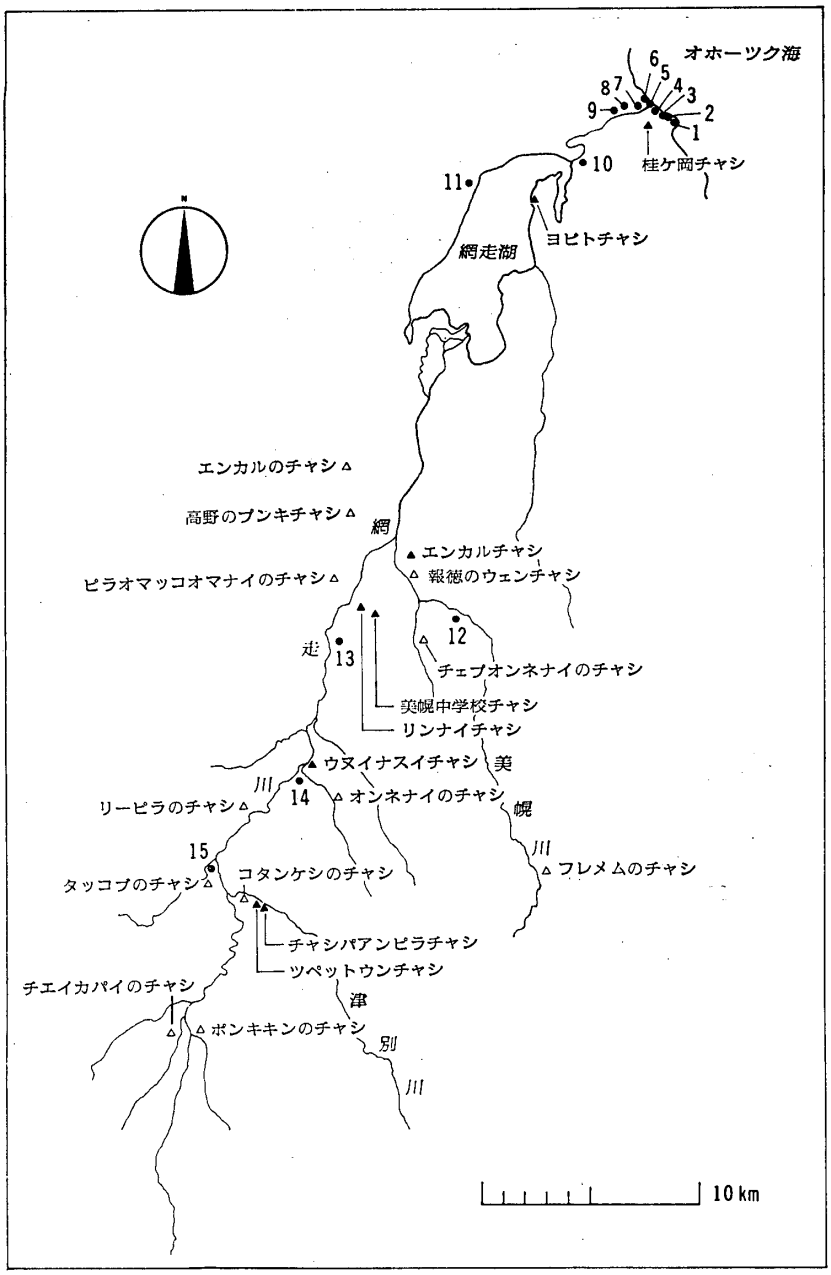
なお，ここでは現在の常呂川の流路の他にかつての常呂川ともいえるライトコロ川とその付近のコタン，チャシを含めて考えてみたわけである。ここで1～6までのコタンと，ワッカのオタチャシ，岐阜のオタチャシを除いた現常呂川筋だけでみると以下のようになる。『廻浦日記』では21戸・110人で，4個のチャシがあることからチャシ人口は27.5人（約28人）となる。『登古呂誌』では40戸・193人で48.3人（約48人）のチャシ人口となる。これは全体を含んだ場合の39人よりさらに増加した数字である。結果的にみて，ライトコロ川筋を含む場合の方が，全道平均に近いものといえる。



第3図　常呂川筋のチャシとコタン

3—5　網走川筋のチャシ

網走川は流域面積で湧別川を若干下回る規模の河川であるが，チャシの数は，実在のチャシ8個，カムイチャシ12個で計20個を数える。最上流部のチャシは河口から川沿いに約60kmしか入っていないが，これは常呂川とほぼ同じ距離に相当する。常呂川筋では6個のチャシ数であるので，いかに多いかがわかる（第4図)。ではチャシ人口を検討してみよう。『廻浦日誌』には8コタンが記録されている。戸口が判明しているものから1戸平均4.5人（4人）として，夷家“有りし”を1戸・4人と数えると，合計で46戸・208人となる。チャシ人口は208人/20個＝10.4人で約10人となる。これは全道平均の最低25人に比較してあまりにも少ない数である。そこで安政3年以前の数字を検討してみよう。1～4のコタン（総称してアハシリという）に住んでいた戸数は100余戸が30戸に



第4図　網走川筋のチャシとコタン

減少したことが同日記に記載されている。[23] また，6モヨロが30→9戸，12ビホロが30余→5戸になっている。そこでアハシリ約400人，モヨロ・ビホロ各約120人として，それらの総計を出すと，約648人となる。チャシ人口は32.4人（約32人）であり，全道平均値の中位に相当する。

『安婆志利誌』，『久摺日誌』の場合をみていこう。両者は地理的に重複がなく，同年の調査であるので合わせて検討していこう。口数は『廻浦日記』の1戸平均4人を参考にする。9コタンが知られているが，787人で，チャシ人口は39.3人（約39人）となる。これは全道平均の上位に相当する数値である。4アハシリは文政5年（1822）時には1,326人を擁していたことが『安婆志利誌』にみられ，この数で口数を考えると計1,399人となり，チャシ人口は70人となる。この数字は全道平均の2倍近い数である。

以上にみてきたように，さほどの大河川でないこの網走川に20個もの多くのチャシが残されてきたことは，この川筋に住むアイヌ人口の多さに比例したものであることが指摘できる。しかし『廻浦日記』にも明記されているように「惣て此アバシリはシヤリ運上家の持内番屋なる」ことをみても，強制村落としてアハシリが存在したことが理解できる。そこでこれら三つの日誌の中から自然村落と考えられるものを抜き出してみると以下のようになる。すなわち，『廻浦日記』の安政3年時の1～6・13のコタン，『安婆志利誌』の7～11のコタン，『久摺日誌』の12・14・15のコタン

第6表　網走川筋のコタン

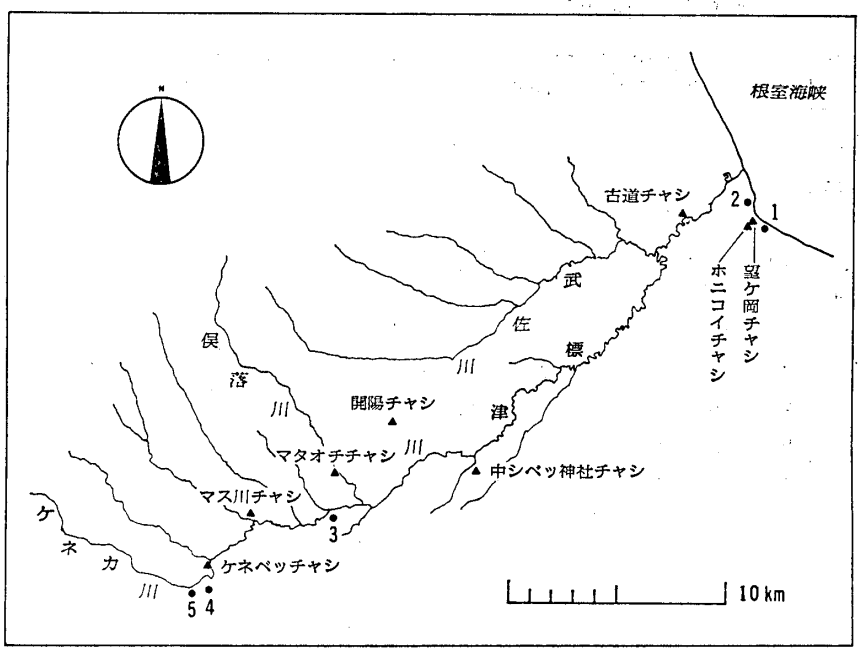
廻浦日記 丙辰・安政3・1856				安婆志利誌 戊午・安政5・1858				久摺日誌 戊午・安政5・1858			
		戸	口			戸	口			戸	口
1	ノツカ	10	44								
2	バナ	8	45								
3	ベナ	6	34								
4	アハシリ	6	20	4	アハシリ	1,326→714					
5	アハシリヘツ	有りし(1)	(4)								
6	モヨロ	30→ 9	37								
				7	ホンモシリ	有りし(1)	(4)				
				8	トロハ	〃 (1)	(4)				
				9	フシココタン	多→ 1	1				
				10	クツチヤロ	有りし(1)	(4)				
				11	リヤウシ	〃 (1)	(4)				
12	ビホロ	30余→ 5	20					12	ビホロ	6	(24)
13	シヨイヒラ	有りし(1)	(4)								
								14	カツクミ	4	(16)
								15	タツコフ	4	(16)

の戸口総数は60戸・261人であり，チャシ人口は13.1人つまり約13人となる。これは全道平均最低値の約半数である。

ところで当河川筋におけるカムイチャシが12個も存在することは，他地域と比較して異常に多い数である。津別町におけるチャシは真貝四郎氏[24]による「コタン・チャシ・アイヌ地名」の図を参考にしている。その中でチャシの記号を付したものは，ウヌイナスイ，オンネナイ，リーピラ，タッコヲ，ツペットウン（ツペッチャシとある）の各チャシで，カムイチャシとしてのコタンケシ，ポンキキンオンネ，チエイカパイの各チャシは地名としてのみ記録されている。よってこの3個は地名の転換によるものなのかもしれない。ただしポンキキンのチャシは『久摺日誌』に「三丁計の土手」ありとされ「トウジンカモイの城跡と云」とあるのでカムイチャシと認めてよいであろう。そこでコタンケシ，チエイカパイの二つのカムイチャシをチャシかどうか不明のものとする。今この2個を除いて先の60戸・261人のチャシ人口を出すと14.5人つまり約15人となる。全道平均の最低値に達しない数字であるが，強制村落の戸口より得られたチャシ人口よりも信憑性が高いといえる。

3—6　標津川筋のチャシ

標津川は第5図に示すようにあまり大きな川ではない。しかしその川筋には実在のチャシが8個確認されている。河口付近には，現河口より約2km南東に離れて望ケ岡チャシ，ホニコイチャシが存在し，河口をさかのぼること約4kmに古道チャシが位置する。そして河口から約20kmさかのぼった中シベッ神社チャシまで中間部には未検出である。そこから直線距離で約4kmで開陽チャシ，さらに約4km離れてマタオチチャシ，また約4kmでマス川チャシ，そしてそこから最上流部のケネベッチャシまでは約3kmの距離にある。中間部に未発見地域を含むが，約4kmの中



第5図　標津川筋のチャシとコタン

間距離を有するという等距離性が認められる。

これに対して，アイヌのコタンは第7表のように5コタンしか記録されていない。『廻浦日記』にみえる1ヲンネナイ，2シベッの戸口から1戸平均の口数を出すと5人である。これから他のコタンの推定口数を出しカッコ内に示しておいた。それによると，『廻浦日記』では47戸・235人であり，チャシ人口は235人/8個＝29.4人つまり約29人と考えることができる。2シベッの口数を『知床日誌』の推定115人とし，これに『東蝦夷日誌』の3チラエワタラ（推定5人）を加えてチャシ人口を出すと，234人/8個＝29.3人（約29人）となり，前者と同じ数値になる。これは全道平均の中位に相当するものである。2シベッの戸口は23戸以上・115人以上と他に比して規模が大きいが，これは強制コタンの性格を有している。29人というチャシ人口と川筋にコタンの存在が少ないという点から考えて，シベッに集まった戸口は当川筋のより上流部からとみなすことも可能である。ところで，最上流部のケネベッチャシの付近には，4ホンケネカ，5ヲンネルゝカのコタンが“有りし”とみえる。これらの戸口9戸・45人はシベッに下ったことも考えられる。そのように考えて『廻浦日記』の口数235人から45人を差引いた数190人でチャシ人口を出してみると，23.8人（約24人）となる。いずれにしても全道平均の最低値に近く，低位のグループに入ると考えられる。

さて，前出の4ホンケネカ，5ヲンネルゝカのコタンはケネベッチャシ付近にあったことがわかるが，このことはチャシとコタンが密接な関係にあることを示している。しかし標津川の場合は，その他に交通路との関係も注意しなければならない。すなわち根室海峡（オホーツク海）と太平洋

第7表　標津川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856			戸口	知床日誌 戊午・安政5・1858		戸口	東蝦夷日誌		戸口
1	ヲンネナイ	20→13	69						
2	シヘツ	65, 6→25	121	2	シベツ	23	(115)		
							3	チラエワタラ	有(1) (5)
4	ホンケネカ	有りし6	(30)						
5	ヲンネルゝカ	有りし3	(15)						

を結ぶ内陸ルートとの関係である。標津川をさかのぼり最上流域のケネベッチャシから西進すると西別川最上流のポンチャシに到達する。およそ13kmの距離である。そこからさらに西に15km弱で釧路川に達し，また約20kmで標茶町に出ることができる。標茶町は太平洋から約40km上流にある。このように標津川をさかのぼりポンチャシを経て釧路川を下ることによって，オホーツク海と太平洋を結ぶことができるわけである。その内陸ルートの要所々々にチャシが点在していると考えることができるわけである。標津川のように規模が小さい河川であっても，チャシ数が多い場合には，このような内陸ルートとの関係で理解してよい場合があるのである。

3—7　釧路川筋のチャシ

では釧路川の場合をみていくことにしよう。釧路川は北海道で第4位の流域面積をもつ大河川である。そしてまたチャシの分布が濃密な地域としても著名なところである。そのチャシ数は実に48個を数える。

これに対して，当川筋におけるコタンは第8表の如く，8コタンしか記録されていない。

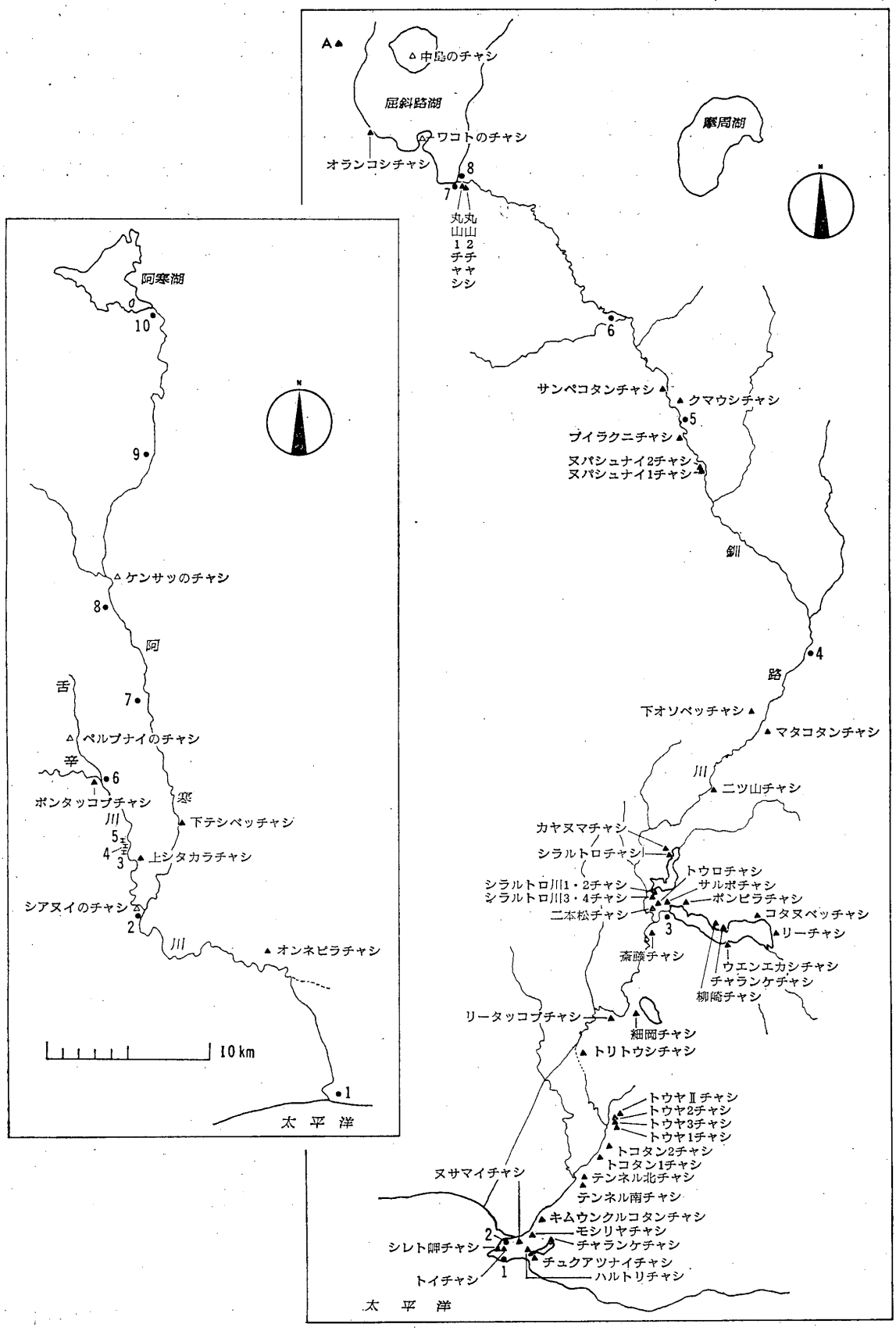
第8表　釧路川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856			戸	口	久摺日誌 戊午・安政5・1858		戸	口
1	ヲニヨウ	有り(1)		(5)				
2	クスリ		81	385	2	クスリ		
3	トウロ	30余→17		99	3	トウロ	16	(80)
4	シヘチヤ	数軒→ 4		25				
					5	クマウシ	1	(5)
6	テシカゝ	有り(1)		(5)	6	テシカゞ	8	(40)
7	クチヤロ	〃 (1)		(5)	7	クツチヤロ	2	(10)
					8	クツチヤロ東岸	7	(35)

『廻浦日記』にみられる2クスリ，3トウロ，4シヘチャの戸口は102戸・509人で，1戸平均4.9人で約5人となる。第8表の推定口数はこれをもって出しておいた。ここで『廻浦日記』の1～4のコタンの戸口，『久摺日誌』の5～8のコタンの戸口の合計を出してみると，121戸・604人となる。48個のチャシがあるので，チャシ人口は12.6人（約13人）となる。強制村落としての2クスリ81戸・385人を含んでも，チャシ人口は低く，全道平均の最低25人の約半数である。そこでもう少し検討してみよう。

第6図にみられるように約20km上流に塘路湖がある。この周辺部はチャシの分布が集中しているところである。これらのいくつかは釧路川筋とは別にひとつの地域的まとまりを示すと思われることから，ここでサルボ，ポンピラ，柳崎，チャランケ，コタヌベッ，リー，ウェンエカシの7個のチャシを除外して考えたい。また同様に，河口部付近の春採湖周辺におけるハルトリ，チュクアツナイ，チャランケの各チャシも釧路川との関係ではなく，湖をとりまく機能を考えた方が妥当である。よって，以上の10個のチャシを除いた38個のチャシをもってチャシ人口を割り出すと，604人/38個＝15.9人（約16人）となる。

ところで前にも少し触れたが，釧路川筋から標津川筋を経て太平洋と根室海峡を結ぶルートがある。それは標茶から虹別（ポンチャシ）を経てケネベッチャシに至るルートである。すでに指摘し



第6図　釧路川・阿寒川筋のチャシとコタン

たことがあるが,[25] 釧路アイヌが釧路から虹別まで鮭漁等に行っている記録がみられる。寛政年間（1789～1800）の釧路場所に使用されていたアイヌは次のように記録されている。「夷人稼業男子ハ……秋冬ハ『ニシベツ』ノ川上ニ行テ過猟魚ヲトル……」（滕知文『東夷周覧』巻之上）。同様の記事は他にもみられる。「男は……冬は西別へ行鮭を取……ホンケネ川にて鷲狩を致し，何れも出産物に相成……」,「志ベツ川上ケネ川ホンケネ川場所は根室場所なれども，前々より久寿里夷人住居す，夏は蝶鮫皮同油アツシの類を産物にす」（「久寿里場所大概書」『東蝦夷地各場所様子大概書』）。この二つの記事は文化年間（1804～1817）のものである。川筋と内陸ルート上に点在するチャシがこのような交易用産物の猟漁行為と関係する場合も認められるわけである。寛政年間は国後の乱（1789）の始まった年でチャシの使用も記録に残されており，現存するチャシがそれらの猟漁行為と直接結びついているものもあるかもしれないことを示している。

なお，釧路川の水源池は屈斜路湖であるが，その西側の美幌峠を越えると美幌川上流部に出て，美幌町を経て網走川を下り，オホーツク海に出ることができる。そのルート上の美幌峠付近には眼下に屈斜路湖を見ることができる実在のチャシ１個が存在する（第６図Ａのチャシ）。これなども付近にコタンはなく，内陸ルート上のチャシと考えざるを得ない。それは狩猟行為の如きものと関連するのかもしれない。この美幌峠チャシを越えると直線距離で約８kmで美幌町フレメムのチャシがある。屈斜路湖側のオランコシチャシまでもほぼ同じ距離である。つまり釧路国と北見国の境界部の中間の高所に陣取っているわけである。その意味から考えると見張りの場としての機能を合せ持っていた可能性もある。

このように屈斜路湖畔のチャシは６個が確認されている。このうち，美幌峠チャシ・オランコシチャシ・中島のチャシ・ワコトのチャシは７・８のコタンとは離れた立地であり，屈斜路湖という地域的まとまりの中で別に考える必要がありそうである。また，丸山１・２の各チャシはごく接近しており同時に機能していたと思われる。以上，オランコシ，ワコト，中島，丸山のうちの１個，計４個を先の38個から除いて34個として，チャシ人口を再度出してみると，604人/34個＝17.8人つまり約18人という数字を得ることができる。少し全道平均値に近づいた値である。では次に釧路川の西に位置する標津川と同規模の阿寒川の場合をみていこう。

3—8　阿寒川筋のチャシ

阿寒川筋におけるチャシは現河口部に未発見であるが，中流域部に７個が存在する。また，もっともコタン数の多い10雄阿閑の付近つまり阿寒川の水源である阿寒湖付近にはチャシの存在が知られていない。コタンは第９表のように記録されている。

10雄阿閑における戸口は46戸・189人で，１戸平均約４人となる。これを利用して推定口数をカッコ内に示しておいた。『廻浦日記』の総口数は229人となり，チャシ人口は32.7人（約33人）である。『久摺日誌』には他に２・７・８のコタンもみられるので，これに『廻浦日記』の１・６・９・10のコタンの戸口を加え，さらに『山川取調図』の３～５のコタンも加えた総数をみると，70

第9表　阿寒川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856				久摺日誌 戊午・安政5・1858				山川取調図			
		戸	口			戸	口			戸	口
1	ヲタノスケ	1	(4)								
				2	シタカロブト	5	(20)				
								3	イチヤンハヲマナイ	(1)	(4)
								4	クマ子ヒラ	(1)	(4)
								5	ヲン子イチヤンハヲマ	(1)	(4)
6	フブウシ	5	(20)	6	フヽウシナイ	4	(16)				
				7	テシベツ	3	(12)				
				8	アキベツ	3	(12)	8	アキヘツ		
9	イキタラウシ	4	(16)	9	イキタラウシ	1	(4)	9	イキタラウシ		
10	雄阿閑	50余→16	59								
	〃	27	114								
	〃	3	16								

戸・285人となる。チャシ人口は40.7人つまり約41人となる。以上の二つのチャシ人口は，全道平均の高位に属するかあるいはやや上回る数である。そこで『廻浦日記』を再度調べてみよう。10雄阿閑の三つのコタンのうち，27戸・114人のコタンは「当時会所元え引移り」とあり，3戸・16人のうち1戸・5人は白糠へ，2戸・11人は仙鳳趾へ「廻り居るより也」と書かれている。すなわち，雄阿閑の安政3年時の居住は16戸・59人である。[26] とすると40戸・155人になり，チャシ人口は22.1人すなわち約22人となる。この数値は全道平均の最低25人に近いものである。いずれにしても，全道平均の前後に位し，大きくはずれる数字とはならないといえよう。

ではここでチャシの点在のしかたをみておこう。オンネピラチャシは河口から約10kmの位置にある。さらに約10kmでシアヌイのチャシに至る。同チャシと上シタカラチャシの間は直線距離で約3km，上シタカラチャシ〜下テシベッチャシ間約3km，ポンタッコヴチャシ〜ペルプナイのチャシ間約3km，ポンタッコヴチャシ〜上シタカラチャシ間約6km，ポンタッコヴチャシ〜下テシベッチャシ間約6kmというように，中流域部の5個のチャシは3kmもしくは6kmの間隔の等距離性を有している。ちなみにペルプナイのチャシ〜ケンサッのチャシ間は約10km，下テシベッチャシ〜ケンサッのチャシ間は約15kmを計る。

なお『廻浦日記』には，10雄阿閑コタンのことを「惣て此辺住居の土人を皆アバシリと云よし」とされている。第1表において，釧路国網走郡とされるのは美幌町，津別町を指しており，このことと関連するのであろう。阿寒川の水源の阿寒湖のすぐ北西部には網走川の源流がきており，釧北峠を越えて網走川筋経由で網走・オホーツク海と交流できるわけである。このような内陸ルートで雄阿寒に美幌・津別の系統のアイヌが居住したのであろう。ただしそれと関係するチャシは今のところ未発見である。

3—9　静内川筋のチャシ

ここまでは天塩川から始まり，オホーツク海側の河川，そして時計廻りに釧路川・阿寒川筋とみてきた。次は十勝川筋における場合であるが，この河川は流域面積・流路延長ともに大きく，ひとつの川筋としてのまとまりで検討することができないと予測される。そこでこの十勝川筋は同様の石狩川筋とともに最後に扱うことにする。

さて，日高国に入って静内川筋の場合であるが，この河川は流域面積が全道28位で，中河川に入るものである。にもかかわらず，チャシの分布密度がやや濃密で，コタンも多く記録されている（第7図，第10表）。

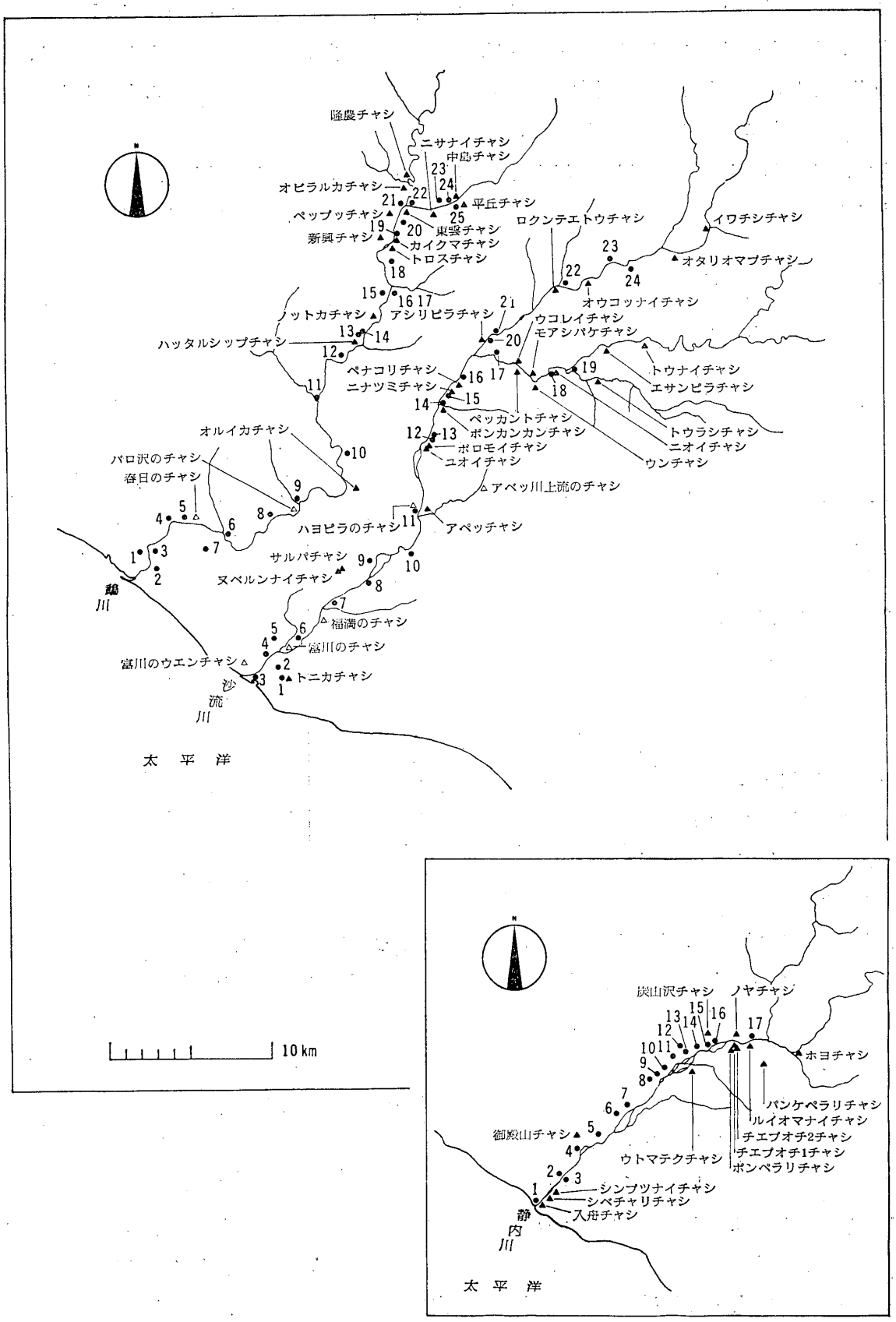
最上流部で確認されているチャシは，ホヨチャシで川筋沿いに河口からおよそ20kmの距離があるにすぎない。これに対して，コタンの分布は18km地点の17チヌエ平が最奥部であり，その間に両者が点在しており，チャシとコタンが密接に有機的に結ばれていることを推測させる。

第10表　静内川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856		戸	口	東蝦夷日誌		戸	口
1	シビチヤリ	35	162				
				2	ヒパウシ	1	(5)
				3	サツ	1	(5)
4	メナブト	昔 2	(10)	4	メナブト	1	(5)
5	ヘツウトル	昔 6	(30)				
6	トウフツ	5→ 4	24	6	トウブツ	14	(70)
				7	イヨフル	12	(60)
8	ヌフカ	5	22	8	ヌブカ	1	(5)
9	タブコサン	昔 7	(35)				
10	ルベシベ	6→ 2	13	10	ルベシナイ	11	(55)
				11	メナヲロ	1	(5)
12	イチフエ	7→ 5	22	12	イチブエイ	5	(25)
13	フールイカ	3	12				
14	マクンベツ	5→15	73	14	マクンベツ	10	(50)
15	ノヤシヤリ	9→ 3	19	15	ノヤシヤリ	2	(10)
16	ヲフシユンケイ	昔 2	(10)				
				17	チヌエ平	5	(25)

『廻浦日記』によると12のコタンが記録されている。戸口が判明しているものから1戸平均の口数を出すと，4.8人（約5人）となる。総戸口を推定すると89戸・432人である。チャシの数は13個であるので，チャシ人口は432人/13個＝33.2人つまり約33人となる。これに対して『東蝦夷日誌』では，前者と多くは重複しているが，やはり12コタンが記録されている。1戸平均5人として総戸口を出すと，64戸・320人であり，チャシ人口は24.6人（約25人）となる。これら二つの33人・25人というチャシ人口はともに全道平均値に見合う数値である。ただし『廻浦日記』にみえる1シビチャリは35戸・162人と強制コタンの感がある。より古い史料たとえば文化9年（1812）調の「志津内場所蝦夷家人別帳」をみても，シビチャリは26戸・147人の多さである。よって『廻浦日記』の1シビチャリには，4・5・9・16の“昔有り”の戸口を含んだものと仮に考えて，それら4コタンの戸口を除外してみる。とすると，347人となり，チャシ人口は26.7人（約27人）と求められる。このように27人・25人というチャシ人口を静内川筋でのあり方と考えておく。

ちなみに，同じ静内場所に含まれていたと思われる今の東静内のある椚別川筋をみておこう。4



第7図　静内川・沙流川・鵡川筋のチャシとコタン

個のチャシがある。『東蝦夷日誌』では，シツナイが文政5年に104戸・523人，安政2年に127戸・642人，モンベッ2戸（10人），その他8コタンが“有”とされる。口数は573人とひじょうに多い。しかし，シツナイは前出の文化9年調の記録では8戸・39人である。この39人と他の9コタンの口数を合計すると89人になる。この場合のチャシ人口は約22人となる。自然村落の形態を考えた場合には，チャシ人口は全道平均値の最低25人には満たないが，それに近いものであることがわかる。

以上のように静内川はあまり規模が大きくない河川にみえるが，その川筋にチャシとコタンが多く混在し，チャシ人口も理想的な姿であることがわかった。ところで，チャシとコタンの連関が認められるとしたが，両者の立地を第7図でみると必ずしも相接して位置しているわけではないことが看取できる。このことは各チャシのもつ機能と関係し，各コタン毎の各チャシの機能配分を意味しているのであろうか。また，最上流部のホヨチャシには，十勝アイヌのtopattumi（夜討・夜襲）の伝承が残されている。当地域のチャシ分布の全体的な位置づけと周辺の状況からみてひじょうに重要なことがらであろう。[27]

第11表　沙流川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856				東蝦夷日誌			
		戸	口			戸	口
1	トンニカ	有りし(1)	(5)	1	トンニカ	11	(55)
2	ヲコタヌサル	有りし(1)	(5)				
3	サルブツ	1	1				
4	サルフト	15→13	64				
				5	ヒタラバ	3	(15)
6	ビラカ	25	145	6	ビラカ	24	(120)
7	シユムンコツ	6→17	94	7	シユムンコツ	30余	(150)
8	チエツホツナイ	昔11					
				9	サラハ	19	(95)
10	ニナ	25→16	67	10	ニナ	有りし(1)	(5)
11	ヒラトリ	17→28	151	11	ヒラトリ	31	(155)
12	ニフタニ	11→25	110	12	ニブタニ	27	(135)
13	ビバウシ	昔10		13	ビハウシ	15	(75)
14	カンカン	昔 2	(10)	14	カンカン	3	(15)
				15	ニナツミ	有りし(1)	(5)
16	ベナコリ	13	106	16	ベナコリ	11	(55)
				17	シケレベ	5	(25)
18	ニヲエ	昔 5→12		18	ニヨイ	9	(45)
19	ヌツケヘツ	8	48	19	ヌツケベツ	有(1)	(5)
20	モビラ	昔 1	(5)				
21	ヲサツナイ	11→ 7	30以上	21	ヲサツナイ	20	(100)
22	ホロケソマツフ	昔 7	86				
23	ホロサル	昔 5→17		23	ポロサル	22	(110)
24	イケウシリ	昔 6					

3—10　沙流川筋のチャシ

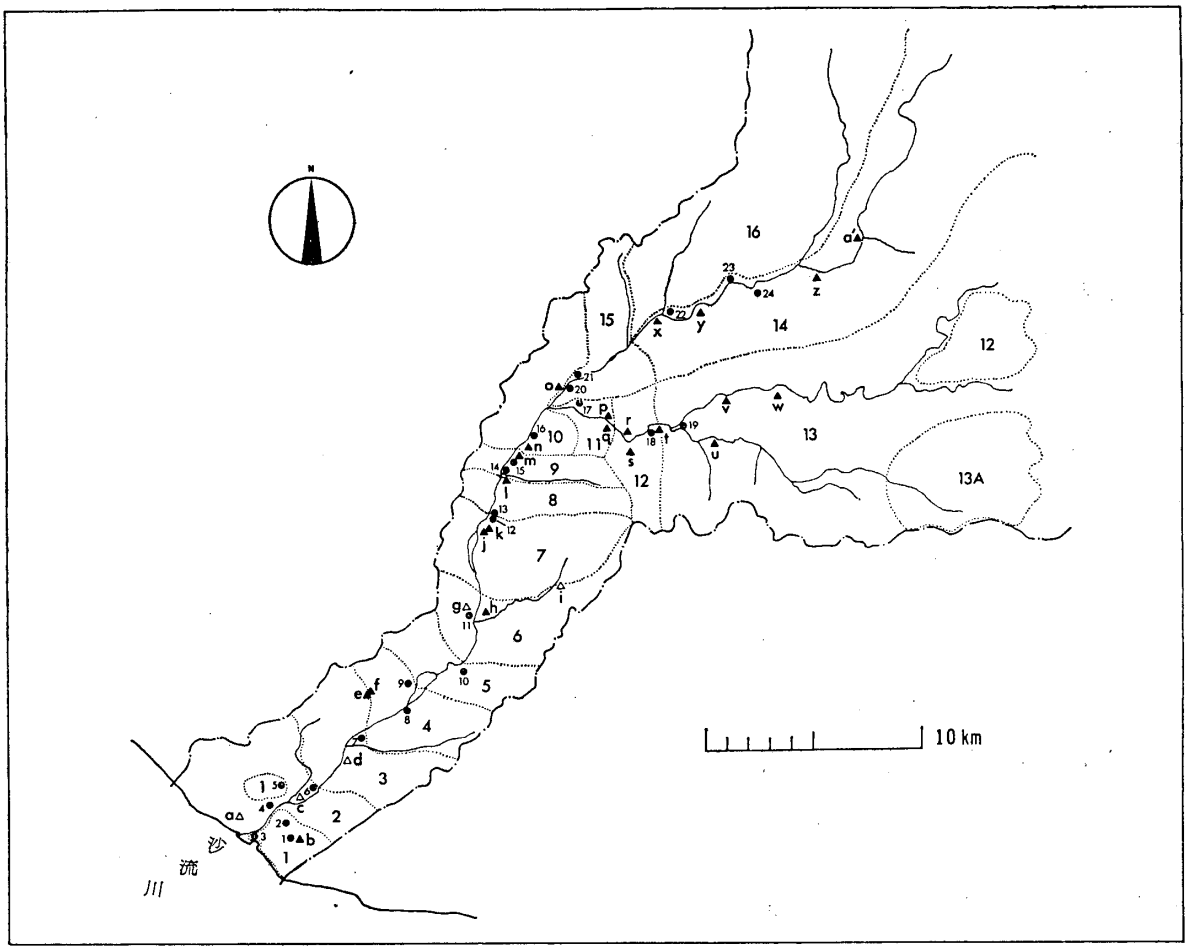
沙流川は中位の規模に属する河川である。最上流部のイワチシチャシまでは河口から川沿いに約42kmの距離がある。そしてその間に，実在のチャシ22個，カムイチャシ5個の計27個が確認されている。それらは2km前後の距離をおいて点在している。また，カムイチャシが中流域より下流部のみに分布しているという点も特徴のひとつである。

コタンは合計24が記録されている。『廻浦日記』には20のコタンがみられ，戸口の判明しているものから1戸平均4.9人（約5人）が得られる。これをもとに総戸口を出すと221戸・927人以上と

なる。この場合のチャシ人口は927人/27個＝34.3人（約34人）である。同様に『東蝦夷日誌』にみられる17コタンの戸口は233戸以上・1,165人以上と推定される。この場合のチャシ人口は43.1人（約43人）と求められる。このように両記録から得られたチャシ人口は34人・43人以上であるが，これらは全道平均値25〜30〜40人の最大値に近いグループになる。

ところで，当沙流川筋のチャシにおいてもtopattumi伝承が比較的多く残されている。すなわち，上流域では最奥部付近のオタリオマッチャシ，中流域ではニオイチャシ，ウンチャシ，ウコレイチャシ，下流域のサルパチャシ，ヌベルンナイチャシ等があげられる。多くは十勝アイヌの攻略の内容である。この他にも，日高アイヌと十勝アイヌの交流を示す言い伝えがいくつも採録されている。[28]そのような伝承類からの内陸ルートの追求さらにチャシとの関係も，今後掘り起していかなければならない問題のひとつであると考える。

また，沙流川筋における場合はiwor（一種の生活領域）[29]とチャシの関係もとりあげなければならない。この点を最初に指摘したのは本堂寿一氏[30]である。筆者も一度検討を加えてみたことがある[31]が，ここで第8図に示すようにiworとチャシおよびコタンの相互の関係をみておこう。カ



第8図　沙流川筋のイオル，チャシ，コタン
（文献29をもとに作成）

ムイチャシについては詳細地点が不明なものがある。またコタンのごく一部も推定のものを含んでいる。

iwor	コ　タ　ン	チ　ャ　シ
1　ピタラパコタン　iwor	5　ピタラパ	
	1　トンニカ	b　トニカチャシ
	2　オコタヌサル	
	3　サルブッ	
2　ピラカコタン　iwor	6　ピラカ	c　富川のチャシ
	4　サルフト	a　富川のウェンチャシ
3　シウンコッコタン　iwor	7　シュムンコッ	d　福満のチャシ
		e　ヌベルンナイチャシ
4　サルパコタン　iwor	9　サルパ	f　サルパチャシ
	8　チェッホッナイ	
5　ニナコタン　iwor	10　ニナ	
6　ピラトリコタン　iwor	11　ピラトリ	g　ハヨピラのチャシ
		h　アペッチャシ
		i　アベッ川上流のチャシ
7　ニプタニコタン　iwor	12　ニブタニ	j　ユオイチャシ
		k　ポロモイチャシ
8　ピパウシコタン　iwor	13　ビバウシ	l　ポンカンカンチャシ
9　カンカンコタン　iwor	14　カンカン	
	15　ニナツミ	m　ニナツミチャシ
10　ペナコリコタン　iwor	16　ペナコリ	n　ペナコリチャシ
		o　アシリピラチャシ
11　シケレペコタン　iwor	17　シケレベ	p　ウコレイチャシ
		q　ペッカントチャシ
12　ニオイコタン　iwor	18　ニオイ	r　モアシパケチャシ
		s　ウンチャシ
		t　ニオイチャシ
13　ヌプキペッコタン　iwor	19　ヌプキペッ	u　トゥラシチャシ
		v　エサンピラチャシ
		w　トゥナイチャシ
14　ポロサルコタン　iwor	22　ホロケソマプ	x　ロクンテエトウチャシ
	23　ポロサル	y　オウコッナイチャシ
	24　イケウシリ	z　オタリオマプチャシ
		a′　イワチシチャシ
15　オサッナイコタン　iwor	21　オサッナイ	
	20　モビラ	
16　オウコッナイコタン　iwor		

本堂寿一氏によるならば，チャシの分布は旧来の iwor とセットになるといわれ，しかも多くは iwor の境界線に接するように位置するとされる。それは，e・f・l・m・n・o・p・q・t・x・y などのチャシにおいて認められる事実である。とすると，この種の iwor 境界部のチャシとそうでない場所に立地するチャシとに機能的な差があるのかもしれない。チャシの研究には，まずその構築

年代を調べ，その構築目的を知り，それがコタンとどのように有機的にかかわっていたのかを検討することが必要であるが，たとえ実際の発掘調査を実施したとしても，それから得られる情報量と内容は限定されている。そこで，種々の方法論を用いて仮説を立てていくアプローチのしかたが必要となってくる。ここでみたような iwor とチャシ，コタンの関係もそのひとつであり，今後は新しい方法論を加えて再検討していくべき課題でもある。また，他地域における伝承などからのiworと同性格の生活領域の線引きも試みる必要があり，それとチャシのありかたとの比較検討も今後の課題である。

3—11　鵡川筋のチャシ

鵡川は沙流川に隣り合っている川で，規模もほぼ同じである。この流域にもチャシとコタンが多く残されている。実在のチャシ13個，カムイチャシ2個の計15個のチャシが認められているが，カムイチャシが下流部に位置するという事実は沙流川と同様であり，ひとつの地域性を示すとともに今後の研究課題でもある。

第12表　鵡川筋のコタン

廻浦日記 丙辰・安政3・1856				東蝦夷日誌			
		戸	口			戸	口
1	ムカワ	4	22	1	ムカワプト	4	(20)
2	チン	13→ 8	53	2	チン	10	(50)
3	イモクヘ	6	27	3	イモツペ	6	(30)
4	ケナシヨロ	7→ 4	20	4	ケナシヨロ	4	(20)
5	カナイ	5→ 4	26	5	カアナイ	4	(20)
6	モイヘツ	5→ 7	37	6	モイベツ	7	(35)
7	ヲサン子ツフ	3→ 1	2	7	ヲサンネフ	1	(5)
8	キリカツ	3→ 4	21	8	キリカツチ	4	(20)
9	ユウヘツ	7→ 8	40	9	ユクベツ	8	(40)
10	バンケキナウス	4	25	10	キナウシ	5	(25)
11	ニワン	7→ 6	41	11	ニワン	6	(30)
12	カイカウニ	6→ 7	30	12	カイカウリ	有りし(1)	(5)
13	イナエフ	12→ 6	35	13	イナユウ	〃 (1)	(5)
				14	イチミフ	6	(30)
15	上ヲナウシ	5→ 8	43	15	キナウシ	8	(40)
16	バンケルベシベ } 12 ↗	5	24	16	ルベシベ	6	(30)
17	ベンケルベシベ } 12 ↘	4	33	17	ヲチヤルセナイ（ルヘシヘ）	3	(15)
18	カイクマ	6	30	18	カイクマ	6	(30)
				19	ホロヌタ	2	(10)
20	シユフンナイ	7→ 9	56	20	シユツフシナイ	6	(30)
21	ホベツ	7	35	21	ホベツ	6	(30)
22	ホンヘツフト	13	55	22	ホベツフト	15	(75)
				23	ハツタルセ	4	(20)
24	ヘトンナイ	5	28				
25	ニナツミフ	7→ 5	26	25	ニナツミ	5	(25)

最上流部のチャシはコタンとほぼ同じ位置にあり，河口から川沿いに約40km の距離である。これも沙流川と似た分布であり，「並んで流れている沙流川は男で，鵡川は女であった。沙流川の古名がシシリ・ムカなのに対し，鵡川は女なのでモ・ムカ（小さい・ムカ）と呼ばれ，それから鵡川の音が生れた」[32]といわれるのも，このチャシ分布のありかたからも頷けるものである。コタンとの関係をみることにしよう。

『廻浦日記』には22のコタンが収録されている。その戸口の平均は，1戸当り5.4人（約5人）で

ある。総戸口は131戸・709人であり，チャシ人口は709人/15個＝47.3人で約47人と求められる。『東蝦夷日誌』における場合は24のコタンがあげられるが，『廻浦日記』の1戸平均5人をあてはめると，総戸口の推定は128戸・640人となる。チャシ人口は42.7人すなわち約43人と計算できる。この鵡川筋ではとくに強制コタンとみなされる大規模村落もなく，すべてが平均的に戸口が多い感じを受ける。このように，47人・43人という二つの高い数値のチャシ人口は，全道平均の最高値40人を超えるものであるが，沙流川も同様に34人・43人という高い数値を示していた。このことは，第1表でみられるように，鵡川筋を含む胆振国勇払領の口数1,238人，沙流川筋の日高国佐留領1,013人という当地域での人口密度の高さによるものと理解される。なぜこのような多くの人口を擁し得たのかということについて，萱野茂氏[33]は沙流川の場合を以下のように説明している。つまり鮭と鹿が豊富で暮しやすかったことを。「そういう食料や飲み水の得やすいところに，アイヌはコタン（村）をつくった。家が1軒か2軒ではコタンと言わないが，3軒以上になるとコタンと言う。広い大自然のなかでくらすのに，1軒や2軒では不便なんだな。……数軒から10軒ほどがちょうど適当だったんだろうね。そういうコタンが，5キロから10キロおきに点々とあった。」という。他の地域では一般に1戸でもコタンと称するのが普通である[34]が，ここでみたように沙流川筋では3戸以上をコタンと呼ぶという。豊かな土地であったことによるもので，戸口の増大とそれに伴ってチャシを多く構築するという結果をもたらしたのであろう。当然，水源が同じ日高山脈にあって，その母なる両乳の流れであるといわれる[35]沙流川と鵡川であることから，鵡川筋の場合も沙流川と同じ状況を考えてよいであろう。

ところで，この鵡川筋のチャシにも二つの topattumi 伝承が残されている。それは中流域のハッタルシップチャシとノットカチャシにおいてである。沙流川筋における場合と比較していくことも今後の課題である。また，現在の穂別町市街地周辺に10個のチャシが集中しており，コタンは8コタンが点在している。チャシとコタンは，最上流部ではその地点がほぼ合致していることから，密接な関係にあることは間違いないところであるが，個別に検討を加えることは今の段階ではできない状況である。今後に残したい。

3—12　十勝川筋のチャシ

では前に残しておいた北海道で第2位の流域面積を有する十勝川筋の場合をみていくことにしよう。

十勝川筋では，羽田野正隆氏のアイヌ・コタンの紹介[36]があり，中でも享和年間（1801～1803）と推定される武四郎の半世紀前の『戸勝川絵図』を利用することができた。氏の作成地図を参考に『山川取調図』，『仮製五万分図』を利用してコタンの位置を推定したのが第9図である。

まず『戸勝川絵図』を検討してみよう。口数は『廻浦日記』の戸口が判明しているものから出した1戸平均4.8人（約5人）を利用することにする。ここで対象とする十勝川筋だけでは48コタンがみられ，総戸口は115戸・575人と推定できる。この場合は，総チャシ数が79個であるので，チャ

第13表　十勝川筋のコタン

戸勝川絵図 享和（1801～1803）			廻浦日記 丙辰・安政3・1856			十勝日誌 戊午・安政5・1858			東蝦夷日誌			山川取調図
	戸	口		戸	口		戸	口		戸	口	
1 於発内	有(1)	(5)	1 ヲホツナイ	9	39				1 ヲホツナイ	5	(25)	
						2 タンネヤウシ	3	(15)				2 タンネヤウシ
3 ネツヲマカ	1	(5)										
			4 ヲサウス	10	39	4 ヲサウシ	11	(55)				
5 ——	3	(15)										
6 アイシニシ	3	(15)				6 アシネシユム	6	(30)	6 アシネシユム	5	(25)	
						7 バラウツカ	2	(10)				7 ハラヒウカ付近
												8 フシコベツ
9 タンシヤノヲタ	2	(10)										
10 ホンヲタ	4	(20)										
			11 タンネヲタ	5	38	11 タンネヲタ	6	(30)				
			12 トカチ	23	81以上	12 トカチ村	3	(15)	12 トカチブト	5	(25)	
									13 ワワウシ	3	(15)	
			14 ヲヘツコウシ	1	4	14 ヲベツコハシ	9	(45)	14 ワベツコハシ	多(9)	(45)	
									15 シチネイ	2	(10)	
16 ヲンネシルトロ	2	(10)										
17 ヌタヘツトフ	5	(25)				17 ヌタベト	3	(15)				
18 ウラホロフツ	3	(15)				18 ウラホロブト	2	(10)				
19 ウタコフシケ	2	(10)										
20 シモイクワツカ	1	(5)										
			21 セヲエ	10	55	21 セヨイ	4	(20)				
22 ウシシベツ	2	(10)										
			23 トヒヲカ	7	34以上	23 トヒヲカ	2	(10)				
24 ノヤウシ	6	(30)										
25 レフンライ	6	(30)										
26 ウツナイブトフ	2	(10)										
			27 テレケフ	5	25							
						28 ヲンネナイ	2	(10)				
29 トブツ	2	(10)	29 トブチ	4	21							

30	ヲタベ	4	(20)												
31	トシベブトフ	2	(10)	31	トシベツブト	16	63	31	トシベツブト川筋	27	(135)	31	トシベツブト	26	(130)
32	アヲウシヒラ	4	(20)												
33	トシベ	2	(10)												
34	シヤモマイ	4	(20)												
35	ノブトロ	1	(5)												
36	ベツホ	1	(5)												
37	ヲリベブトフ	2	(10)												
38	ホロケナシ	2	(10)												
39	ビリベツブトフ	2	(10)												
40	ビリベツ	1	(5)												
								41	アシヨロ	13	(65)	41	アシヨロ付近	13	(65)
															42 ラワン
															43 ラワン北岸
															44 リクンベツフト
				45	サウルサン付近	4	(20)								
															46 フルケシ
47	チヨタ	1	(5)	47	チヨタ	6	(30)	47	チヨダ	8	(40)				
48	フシコトカチ	3	(15)	48	フシコトカチ	17	85								
49	ヤムワツカヒラ	5	(25)	49	ヤムワツカヒラ	16	73以上	49	ヤムワツカヒラ	有(1)	(5)	49	ヤムワツカ	有(1)	(5)
								50	カモキナイ	4	(20)				49 ヤムワツカヒラ
51	——	2	(10)												
				52	シヤリヘツ	有りし(1)	(5)								
								53	イイカンベツ	10	(50)				
54	ホロナイブトフ	3	(15)												
				55	イナウス	有りし(1)	(5)								
56	マカンベツ	1	(5)	56	マカンヘツ	有りし(1)	(5)								
								57	ホロノコツチヤ	2	(10)				
								58	ジロトウ	5	(25)				
								59	ベツチヤラ	1	(5)				
60	サツテコヲトフケ	1	(5)	60	サツチクヲトフケ	有りし(1)	(5)								60 サツテクヲトフケ
61	サツナイブトフ	2	(10)												

第13表　十勝川筋のコタン（つづき）

戸勝川絵図 享和（1801～1803）			廻浦日記 丙辰・安政3・1856			十勝日誌 戊午・安政5・1858			東蝦夷日誌			山川取調図
	戸	口		戸	口		戸	口		戸	口	
62 サツナイ	3	(15)	62 サツナイ	21	110				62 サツナイ	4	(20)	
									63 ヌツホコマ	1	(5)	63 ヌツホコマ
									64 ベエトカリ	1	(5)	
									65 ヌツカクシユナイ	2	(10)	
									66 トツタベツ	2	(10)	
67 バラトブトフ	1	(5)										
						68 ヌブカ	4	(20)				
												69 フシコヲヘレヘレフ
						70 ヲベレベレフ	2	8				70 ヲヘレヘレフ
												71 チエツフマクンヘツ
			72 ヲトフケナイ	7	38	72 ヲトケブト	21	(105)	72 ヲトケプブト	9	(45)	72 ヲトケフフト
									73 ニウシベツ	2	(10)	
												74 アマラ
75 ヲトフケ	2	(10)							75 ヲトケプ	13	(65)	
76 カバツリウシ	1	(5)										
77 ホンヨコウシ	3	(15)										
78 シカルベツ	2	(10)	78 シカリヘツ	12	46	78 シカリベツ	16	(80)	78 シカリベツブト	4	(20)	
79 ニノモツケナシ	1	(5)										
									80 バンゲチ	1	1	
									81 ベンゲチ	6	(30)	
82 ——	1	(5)										
83 ヒヘイロ	2	(10)	83 ヒハイロ	1	4	83 ビバイルブト	8	34	83 ビバイロ	1	(5)	
84 ネモロ	3	(15)	84 メモウロ	12	81	84 メモロブト	2	8				
85 シヤウルブトフ	3	(15)	85 サヲロ	14	80	85 サヲロブト	3	14				
						86 チフル	1	5				
						87 ヌカトマフ	3	(14)				
88 ヒウハ	3	(15)				88 ビバウシ	2	(10)				
89 ニトマツフ	2	(10)				89 ニトマフ付近	3	23				
						90 マクンベツ	1	4				
						91 トミタビラ	2	10				
						92 クツタルシ付近	2	9				
						93 チヤシコツ付近	1	4				

シ人口は575人/79個＝7.3人（約７人）となる。『廻浦日記』をとりあげてみると，24コタンがあり，204戸以上・986人以上である。チャシ人口は12.5人つまり約13人以上と計算される。『十勝日誌』の場合は，36コタンが記録されている。戸口判明のものから１戸平均を4.75人つまり約５人として，総人口は195戸・968人以上となる。チャシ人口は968人/79個＝12.3人（約12人）となる。『東蝦夷日誌』では，21コタンと少なく，やはり１戸平均５人として，総戸口が115戸・571人であり，この場合のチャシ人口は7.2人（約７人）と極端に少なく，『戸勝川絵図』の場合と似ている。

このように十勝川の如き大河川の場合は，全体をひとつの地域的まとまりとして考えることは無理のようである。いくつかの小単位に分けて考えていくことにしよう。

利別川が十勝川に合流する現在の池田町から下流の地域をひとつ考えることができる。１～30までのコタンを含むものでA地域としておく。そしてそれより上流域の45～93のコタンのあるB地域，利別川筋の31～44のコタンのC地域に分けることにしたい。この三地域のチャシ数，戸口，チャシ人口は各史料別に以下のようになる。

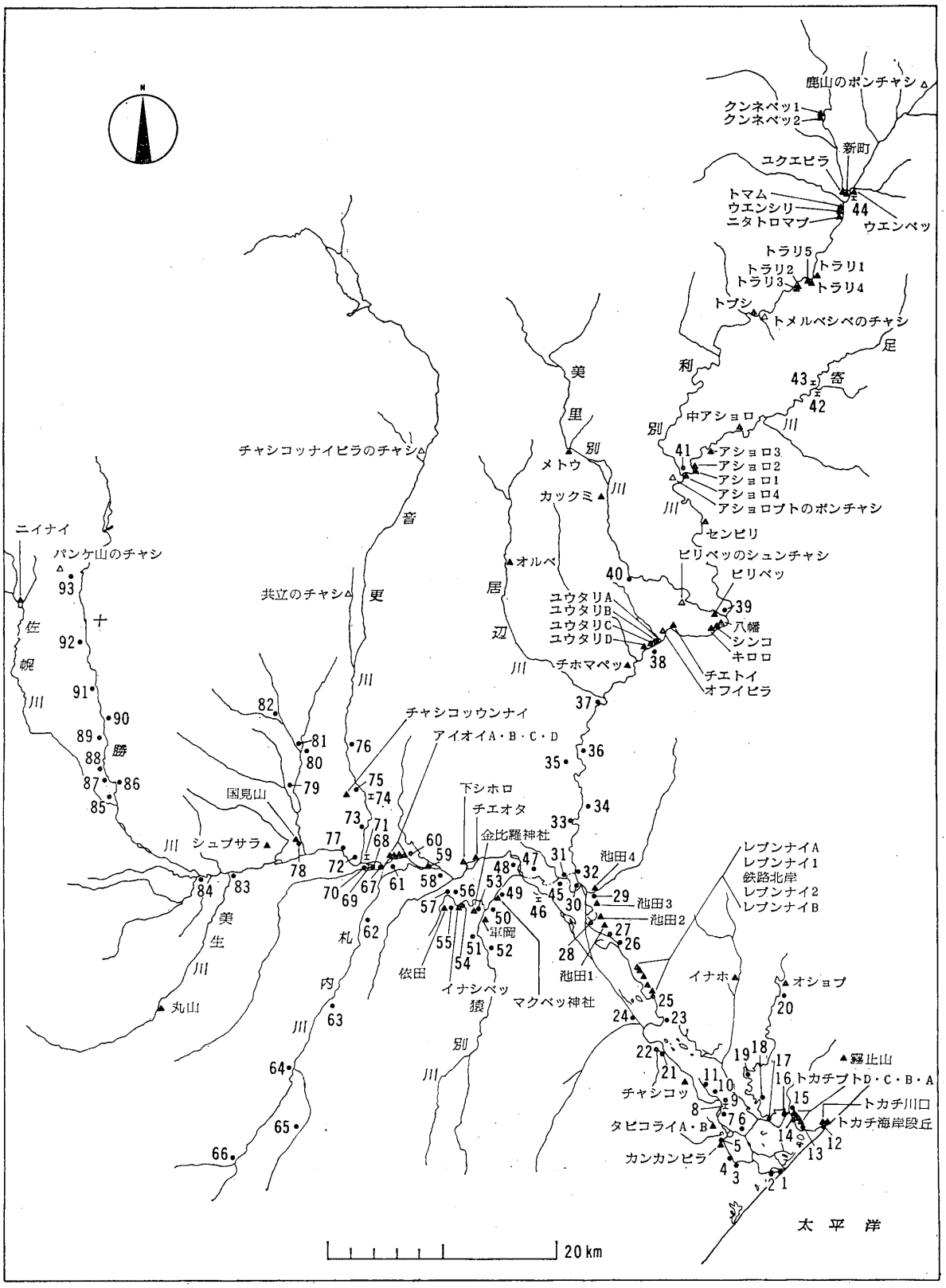
		戸勝川絵図		廻浦日記		十勝日誌		東蝦夷日誌	
	チャシ数	戸口	チャシ人口	戸口	チャシ人口	戸口	チャシ人口	戸口	チャシ人口
A	22	49・245	11.1	74・336	15.3	53・265	12.0	29・145	6.6
B	19	45・225	11.8	114・587	30.9	102・503	26.5	47・231	12.2
C	38	21・105	2.8	16・63	1.7	40・200	5.3	39・195	5.1

以上のようなチャシ人口が導かれるが，全道平均値25～30～40人に近いのは，B地域における『廻浦日記』，『十勝日誌』の約31人，約27人の二例だけである。他はすべて低い値であり，とくにC地域における場合は，約２人～５人のチャシ人口になっている。このことは，チャシの分布が集中しているにもかかわらず，コタンの存在の記録が稀薄であることに起因している。ではもう少し検討してみよう。山田秀三氏[87]は，玉蟲義の『入北記』（安政４年）の記事から

十勝領	トシベツフト村	4軒	18人
	トシベツ村	25軒	113人
釧路領	アショロ村	13軒	84人
	アハシリ村	41軒	196人

に注目している。釧路領アショロは今の足寄町・陸別町を指し，釧路領アハシリは前にも触れたが，美幌町・津別町をいっていることを指摘している。とすると，C地域の足寄町（41アショロ）より上流域は釧路アイヌの領域に入るわけである。事実，足寄川をさかのぼって行くと阿寒湖に達し，また利別川をのぼり鹿山のポンチャシを経て津別町本岐に行くという二つの内陸ルートは現在でも重要交通路になっている。このように，足寄・陸別・津別・美幌・阿寒湖を結ぶ地域はひとつの領域としてとらえることが可能である。本論では川筋毎の検討を行っているので，別の生活領域としての考察は改めて考えることにする。

さて『入北記』にみえる戸口を利用して再度チャシ人口をみてみよう。足寄町より上流域を除い



第9図　十勝川筋のチャシとコタン

た31～40までのコタンは，トシベッブト，トシベッの二つに限定される。戸口は合せて29戸・131人である。チャシ数は15個であり，チャシ人口は8.7人（約9人）となる。これにしても，チャシの数に比して人口が少ないことがわかる。

以上，問題を残しているが，A地域では『廻浦日記』の約15人のチャシ人口，B地域では『廻浦日記』の約31人，『十勝日誌』の約27人，C地域では『入北記』の約9人のチャシ人口を想定することができる。A地域は全道平均値に近いともいえるもので，B地域は平均値の中位に位置するものである。ただし，札内川筋には5コタンが採録されているにもかかわらずチャシが未発見であること，十勝川上流域や佐幌川筋にコタンに比してチャシが僅少であること，居辺川筋にコタンがないことなど問題点がある。そして，C地域のチャシ人口の低さの問題，釧路領の足寄・陸別におけるコタンの少なさとチャシの異常な集中分布をどう考えるか今後に残された課題である。

では最後に，十勝川と同様に規模の大きい石狩川（流域面積は本道第1位）の流域における場合を検討してみよう。

3—13　石狩川筋のチャシ

石狩川も前の十勝川の場合と同様に三つの地域に大別して考えることにしよう。その前に，いわゆる石狩十三場所について触れておく必要がある。当場所は文政頃（1818～1829）のもので，文化6年（1809）改の各場所とアイヌの口数は以下のように記録されている（『西蝦夷日誌』）。

トクピタ	1,170人	上ユウバリ	372人
シユウマムツプ		下サツポロ	194人
上ツイシカリ		下カバタ	102人
下ツイシカリ		ナイボ	29人
ハツシヤブ		上サツポロ	194人
上カバタ	372人	シノロ	138人
下ユウバリ	492人		

合計3,067人（3,063人？）である。これらの口数のアイヌが各場所の運上屋元に移住，労働を強制させられたといえるが，その後は第14表のように再解体したのであろう。

さて，三地域区分のA地域は，石狩川下流域で，河口から千歳川・夕張川が合流する江別市付近までとしておく。この地域内には5個のチャシが認められる。コタンは1～26までが含まれる。第14表にあげた各日誌類のうち『再航蝦夷日誌』，『廻浦日記』，『再篙石狩日誌』をそれぞれ検討してみよう。なお，口数不明のコタンは『廻浦日記』の1ヘッブッの1戸平均約4人を基準として推定することにした。

	再航蝦夷日誌		廻浦日記		再篙石狩日誌	
チャシ数	口数	チャシ人口	口数	チャシ人口	口数	チャシ人口
5	148	29.6	786	157.2	173	34.6

第14表　石狩川筋のコタン

再航蝦夷日誌 丙午・弘化3・1846	廻浦日記 丙辰・安政3・1856	石狩日誌 丁巳・安政4・1857	再篙石狩日誌 丁巳・安政4・1857	夕張日誌 丁巳・安政4・1857	由宇発利日誌 丁巳・安政4・1857	志古津日誌 丁巳・安政4・1857
戸　口	戸　口	戸　口	戸　口	戸　口	戸　口	戸　口
1　ベツブツ 6,7　(28)	1　ヘツブツ 165　670					
			2　フル 4　13			
3　トクヒラ 2　(8)			3　トクビラ 2　8			
			4　ヲヤウ 1　4			
5　シビシヒシ 1　(4)						
			6　下トヤウシ 2　6			
			7　上トヤウシ 1　3			
8　ハンナンコウ 有(1)　(4)						
9　ヲヒタリ 〃(1)　(4)						
10　ハツシヤフ 5,6　(24)	10　ハツシヤブ 有(1)　(4)					
11　サツホロ 6,7　(28)	11　フシコサツホロ 多(7)　(28)					
			12　フシコハツシヤフ　4　10			
	13　シノロ 有(1)　(4)					
14　ベケレトシカ 有(1)　(4)						
15　トンビ 〃(1)　(4)						
16　カマヤウシ 〃(1)　(4)						
17　トンヒル 〃(1)　(4)						

18 タン子ヤウシ 有(1) (4) 19 トママツタイ 〃(1) (4)						
	20 ナイボウ 多(3) (12) 21 上サツホロ 有(1) (4)		20 ナエホ 有りし(3) (13) 21 上サツホロ 20 79 22 サツホロ 5 26			
23 ツイシカリ 5,6 (24)	23 トイシカリフト 7,8 (32) 24 上ツイシカリ 多(8) (32)	23 津石狩 漁屋数十	23 ツイシカリ 1 7			
			26 ハンケヨスベ 有りし(1)	25 エベツブト 有りし(10余)(44)	25 エベツブト 有りし(11)	
27 シユママツプ 3,4 (16)	27 シユママツフ 多			27 シユママツフ 1 (4)	27 シユママツフ 多→ 1 (4) 28 ナイホ 有りし(1) (4)	
29 イサリブト 5,6 (24)				29 イサリフト 7 (28) 30 イサリ 9 (36)	29 イサリフト 8 31 30 イサリ 12→ 5 12 31 ソウベツ 有りし(1) (4)	
32 カマカ 有(1) (4)						
				33 ヲサツトウ 9 (36)	33 ヲサツ 8 25	
34 ホンベツ 2,3 (12)						34 ホンベツ 有りし(1) (4)
35 チトセ 10余 (40)				35 千歳 15 (60)		35 チトセ 15 (60)
36 トエトマリ 6 (24)						36 トヘトマイ 有りし(1) (4)

第14表　石狩川筋のコタン（つづき）

再航蝦夷日誌 丙午・弘化3・1846	廻浦日記 丙辰・安政3・1856	石狩日誌 丁巳・安政4・1857	再篙石狩日誌 丁巳・安政4・1857	夕張日誌 丁巳・安政4・1857	由宇発利日誌 丁巳・安政4・1857	志古津日誌 丁巳・安政4・1857
戸口	戸口	戸口	戸口	戸口	戸口	戸口
※ アツイシ 3 (12)				37 ランコウシ 4 (16)		37 ランコウシ 3 18
※ カマケ 5 (20)						38 カマバ 有りし(1) (4)
※ ニセトク 16 (64)				39 ベサ 5 (20)		39 ベサ 4 16
						40 ナイフツ 有りし(1) (4)
						41 マス 〃 (1) (4)
						42 ヌツタ 〃 (1) (4)
						43 ユウコツブト 〃 (1) (4)
				44 ルウサン 3 (12)		44 ルウエン 2 8
						45 マツクシリ 有りし(1) (4)
				46 ヲロツコチ 4 (16)		46 ヲセツコチ 3 10
						47 シユ子チヤ 有りし(1) (4)
						48 シトクン子ベ 〃 (1) (4)
				49 ヌンナイ 2 (8)		49 ヌンナイ 2 9
						50 ウツカカ 有りし(1) (4)
						51 シヨツキ 〃 (1) (4)
				52 ヲサクマイ 5 (20)		52 ヲサクマナイ 5 16
				53 モベツブト 有りし(1) (4)		53 モヘツブト 有りし(多) (8)

						54 ママツブト 有(1) (4)
					55 シュクバイ 有りし(8) (32)	
					56 ツカベツブト 川筋〃 (1) (4)	
57 ホロシリ 2 (8)						
				58 フシココタン 有りし56(224)	58 フシココタン 有りし(多)(2)(8)	
					59 ノヤサロウシ 〃 (2) (8)	
					60 アチヤンベ 〃 (2) (8)	
					61 ウエンヘツ 〃 (2) (8)	
					62 テー子ナイ 〃 (2) (8)	
	63 上ユウハリ 多				63 上ユウハリ 7 23	
				64 タツコフ 有(1) (4)	64 タツコブ 1 4	
				65 アノロ 有りし(1) (4)	65 アノロ 有りし(9) (36)	
					66 ビラ 1 4	
				67 タイケシ 3 (12)	67 タイケシ 4 12	
	68 下ユウハリ 多				68 下ユウハリ 14 49	
				69 ヲヒブイ 有りし(1) (4)	69 ヲヒブイ 有りし(1) (4)	
					70 ベンケタラ 〃 (1) (4)	
	71 トウベツ 有(1) (4)					
			72 下カバタ 有りし(10) (31)			

第14表　石狩川筋のコタン（つづき）

再航蝦夷日誌 丙午・弘化3・1846	廻浦日記 丙辰・安政3・1856	石狩日誌 丁巳・安政4・1857	再篙石狩日誌 丁巳・安政4・1857	夕張日誌 丁巳・安政4・1857	由宇発利日誌 丁巳・安政4・1857	志古津日誌 丁巳・安政4・1857
戸口	戸口	戸口	戸口	戸口	戸口	戸口
			73 ビバイ 有りし(3,4) (16)			
			74 サツヒナイ 〃 (3) (12)			
	75 ウラシナイ 1 1	75 ウラシナイ 有りし(1)	75 ウラシナイ 〃 (5) (15)			
			76 チカフセツ ウシ 3,4 (16)			
			77 ホンベタラ 有りし(1) (4)			
	78 トツク 3 (12)	78 トツクブト 3	78 トツク 3 (12)			
			79 トツク北7,8丁 6,7→3 8			
			80 ヲシラルカ 3,4→1 4			
			81 ホンシユシ ユシ 1 (4)			
			82 フシコウリウ 有(1) (4)			
	83 メム 3 (12)					
			84 シユフヲマナイ 有りし(1) (4)			
		85 ベツバラ 2	85 ベツバラ 2 7			
			86 イチヤヌニ 有りし(1) (4)			
			87 ニウシベツ 2 0			
		88 イジヤン 3 (12)	88 イジヤン 2 3			
		89 シキウシバ 2 (8)				
			90 エタンベツ 有りし(2,3) (12)			
			91 チカブニ 〃 (多) (8)			
		92 ベツチウシ 6 (24)	92 ベツチウシ 2 5			
			93 ホンメン 8 (32)			

		95 チクベツブト番屋 1 (4) 96 メム 5 106 ヲチンカバ 1 110 キンクシベツ 2 111 アサカラ 2 112 ウエンベツ 5 (20)	94 ホンフシコベツ 3 (12) 96 メム 4 7 97 フシコベベツ 1 4 98 フシコチユクベツ 1 2 99 —— 2 (8) 100 ヒラ 1 3 101 チエツホ付近 1 2 102 ベヽツ 有りし(多) (8) 103 ヒエ 〃 〃 (8) 104 フウレベツ 〃 (1) (4) 105 ウシシベツ 〃 (1) (4) 106 ヲチンガハ 多→ 1 4 107 ウエンキウバ 有りし(1) (4) 108 ヌサウシバ 〃 (1) (4) 109 ケナシトマム 〃(3, 4) (16) 110 キンクシベツ 2 2 111 アサカラ 2 (8) 112 ウエンヘツフト 4 13 113 ヒヒ 17, 8→3 11 114 タナウシ 有りし(1) (4) 115 ヘンケメムナイ 〃 (1) (4)			

※印は位置不明

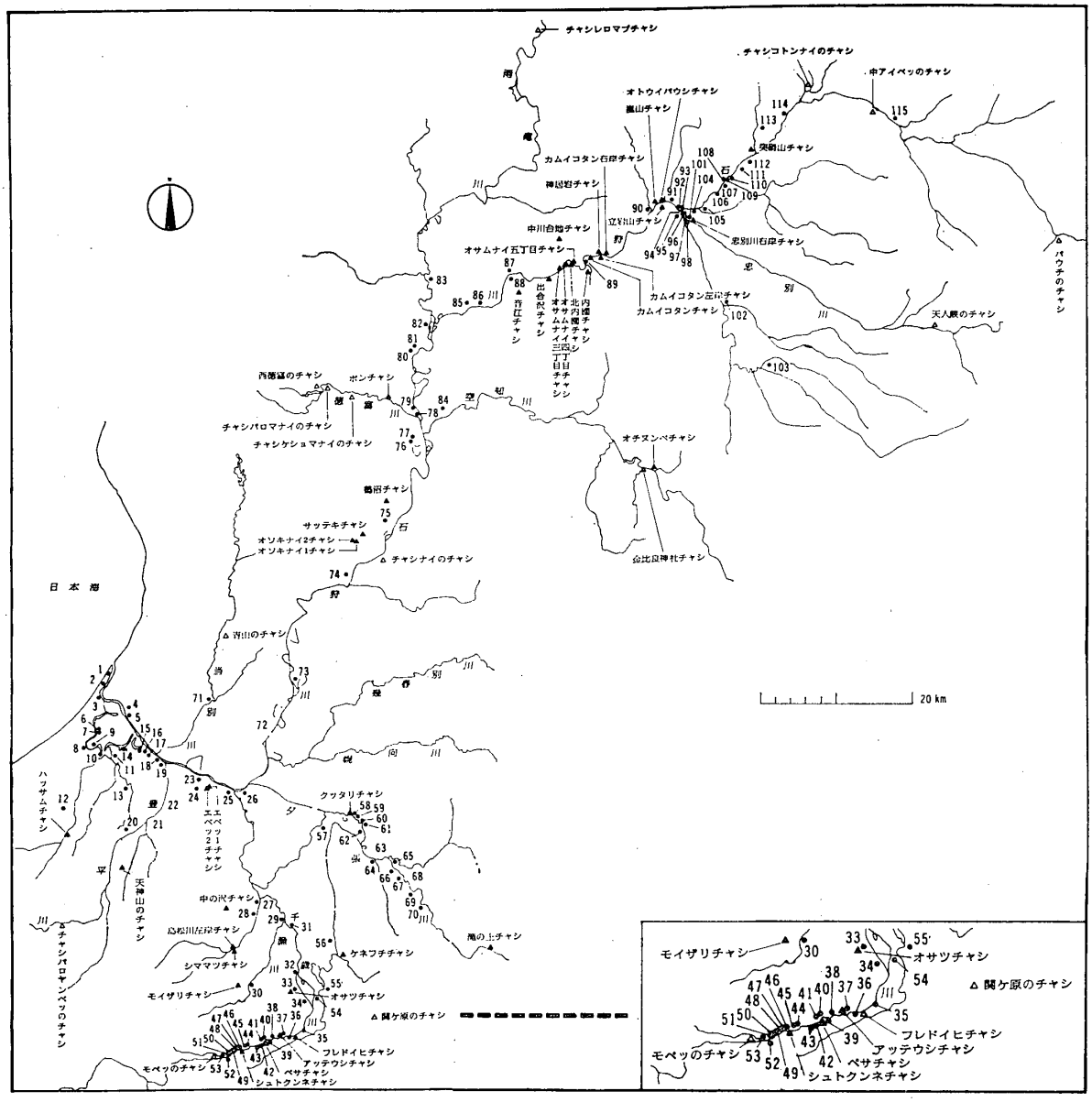
これで得られたチャシ人口は，『再航蝦夷日誌』の約30人，『再篙石狩日誌』の約35人が標準的な人口となっている。『廻浦日記』の約157人は異常な数字である。1ヘッブッの165戸・670人は石狩十三場所の名残りと考えられる。『廻浦日記』には「其辺は当所支配内十三ヶ所有し由。今は其遠き処は絶え，近き処は追々増，増減も多きよしなるに……」とあり，安政3年調の際にこの数字になっていたと思われる。よってチャシ人口をみる際には考慮に入れなくてよいであろう。ちなみに，786人からこの670人を除外して計算すると，チャシ人口は23.2人（約23人）となる。これに近い数を推定できよう。

B地域は，千歳川と夕張川流域を含めることにする。14個のチャシが確認されているが，夕張川筋ではコタンの数の割にはチャシが少なく，将来，発見される可能性を残している。では『再航蝦夷日誌』，『夕張日誌』，『由宇発利日誌』，『志古津日誌』を検討してみよう。なお，『由宇発利日誌』と『志古津日誌』は調査年が同年で地域を異にしているので，合せて検討を加えることにする。

	再航蝦夷日誌		夕張日誌		由宇発利・志古津日誌	
チャシ数	口数	チャシ人口	口数	チャシ人口	口数	チャシ人口
14	224	16.0	508	36.3	489	34.9

これによると，B地域のチャシ人口は，16人，約35人，約36人となる。『再航蝦夷日誌』の16人は少し低い数値であるが，35～36人の方は全道平均の高位に属するものである。とくに夕張川筋でチャシが発見されるならば，理想的なチャシ人口に近づくと思われる。ちなみに，チャシとコタンの調査がほぼ完全な千歳川筋だけでみると，27～56のコタンの口数は313人，チャシ12個で，チャシ人口は約26人である。きわめて標準的である。

C地域は，夕張川が石狩川に合流する地点から上流域すべてを含めてとらえてみた。71～115までのコタンと34個のチャシを含んでいる。この地域に関しては『再篙石狩日誌』がもっとも詳細である。1戸平均4人として戸口を出してみると，98戸・333人である。これに71トウベッ1戸4人を加えて，チャシ人口は337人/34個＝9.9人，約10人となる。この数値は，全道平均の最低値25人の半数にも満たないものである。よってこのC地域はもう少し細分する必要がある。各支流毎の検討が必要であろう。空知川では2個のチャシと1コタンがあるのみで計算の対象にはならない。上流域のチャシ付近までいくつかのコタンが存在したのであろうが記録には残されていない。徳富川筋には4個のチャシがみられる。コタンは2つのみである。これもこのままでは扱えない。雨竜川筋はカムイチャシが上流部に1個あるのみで，これに対してコタンも1つあるだけである。このようにこれら3本の支流は最上流部にチャシを有するもののコタンは河口合流部付近にしか存在していない。とすると考えられるのは，内陸ルートとしての川筋でありそのルート上のチャシということになる。空知川は現在その川に沿って国鉄根室本線と国道が走っているルートで，石狩国と十勝国を結ぶ重要幹線である。また，徳富川は浜益へ抜けるルートのようである。雨竜川の場合は，国鉄深名線に沿っており，名寄へのルートのひとつになっている。そこでこのC地域を石狩川本流沿



第10図　石狩川筋のチャシとコタン

いだけで考えてみることにする。すなわち，71・83・84・102・103のコタンを除き，青山のチャシ，オチヌンベチャシ，金比良神社チャシ，ポンチャシ，チャシケショマナイのチャシ，チャシパロマナイのチャシ，西徳富のチャシ，チャシレロマプのチャシ，天人峡のチャシの9チャシを除外してみよう。口数は313人となり，チャシは25個であるので，チャシ人口は12.5人（約13人）となる。さらにこの本流沿いを細分して，夕張川～空知川のそれぞれの合流点までの間でみると，口数94人，チャシ5個でチャシ人口は約19人となる。それより上流部の石狩川筋だけをみると，口数219人でチャシ20個である。チャシ人口は約11人となる。

以上，A～C地域の大別と細別を検討してきたが，A・B地域ではおおむね全道平均値に近いチャシ人口を擁していることがわかった。上流部の地域に関しては，チャシ数の割にコタン口数が少

ないことが判明した。ちなみに『西蝦夷日誌』には，石狩十三場所には文化6年（1809）改で3,067人とある。比較的下流域に集中しているわけである。そしてその当時の「上川には六百人計も別になりしが今は追々人員減じぬ」とされる。3,067人に600人を加えると3,667人で総チャシ数53個で割ると，約69人のチャシ人口となる。本川筋を一律に考えるとこのような数になるわけで，C地域の「上川」部分が人口減少のため，低いチャシ人口となっていることがこの数字からも理解できる。武四郎はさらに続けて厳しく場所請負人を糾弾する。「此皆請負人より非道の遣方厳しく，夫婦たりとも其夫は遠き場所に遣し，婦を己が妾として別場所に置，孕姙（ハラム）時は水臘（イボタ）樹に蕃椒（トウガラシ）を加て是を努て呑し脱胎させ候間，人員日々に減損す。……」と。自然村落の解体過程の一端を知ることができる事実である。

4

以上，チャシの分布が比較的多くみられる地域に関して川筋毎の検討を加えてみた。それはチャシ人口を割り出して，他とあるいは全道平均値と比較してみるという方法論を実践してみたわけである。全道的な平均値は，低い方が25人～30人に1個の割でチャシが分布し，高い方では30～40人に1個というチャシ人口が始めに得られた。ここで，各川筋の流域面積，流路延長，チャシ数，チャシ人口をまとめて表にしておこう[38]。流域面積の大きい方から並べる。

順位	河川名	流域面積(km²)	流路延長(km)	チャシ数（個）		チャシ人口（人）
1	石狩川	14,375.6	269.4	53	A 5	30, 35
					B 14	26, 35, 36
					C 34 (25)	13
2	十勝川	8,226.2	223.0	79	A 22	15
					B 19	27, 31
					C 38 (15)	9
3	天塩川	5,594.3	289.7	11		25, 37
4	釧路川	2,785.1	172.3	34		18
7	常呂川	1,968.2	120.2	6		27, 39
10	湧別川	1,454.1	86.7	6		21, 22, 28
12	網走川	1,367.3	93.6	20		15
13	沙流川	1,342.5	103.8	27		34, 43
14	鵡川	1,240.9	76.8	15		43, 47
16	渚滑川	1,162.9	83.6	3		28
26	標津川	671.1	77.9	8		29
27	阿寒川	658.7	98.4	7		22, 33, 41
28	静内川	649.8	68.0	13		25, 27

チャシ人口は，この表に示したように13河川で30例を一応とりあげてみることができた。そして，全道平均値25～30～40人の幅の中に収まるのは30例中18例であることが判明した。さらにこの全道平均値の最大値，最小値に±10%の幅をもたせると，約22人～44人となる。これは最大が最小の2倍以内のチャシ人口の幅であることを意味する。この範囲内に入るものを加えると30例のうち23例

が該当する。約77％である。今回ここでみてきた如き，チャシ人口を割り出すという作業は，河川筋にチャシが分布する地域においては，22人から44人に１個の割のチャシ人口を標準的なものと仮定すると，実に60％から80％弱のものがこの中に収まり，ひとつの法則性といったものが導き出せる結果となったのである。しかし，これに該当しない特異なものも存在する。ひとつは石狩川Ｃ地域と十勝川Ｃ地域に示されるものである。コタン口数の割にチャシ数が多く，13人，９人というチャシ人口である。全道第１位・第２位の大河川の上流域における場合ということで共通しており，別に考える必要がありそうである。他のひとつは，18人，15人のチャシ人口が出された釧路川，網走川の例である。これも十勝川Ｃ地域を含めて，“釧路国網走郡”，“釧路領アショロ”，“釧路領アハシリ”などの関係から再考察すべきものである。いずれ稿を改めて検討を加えたい。なお，川筋毎の検討ということで今回とりあげなかったチャシ集中地域も他にみられる。知床半島部，根室半島部，浜中町付近，厚岸町付近などの地域である。これらについても地域的まとまりを考えて再度検討する所存である。

ところで，いつも指摘していることであるが，このようなアイヌ・コタンの戸口数とチャシの比較研究には問題点がある。コタンの動向を知り得る最良の史料はここでも扱った如く松浦武四郎の記録である。それらは多くは安政年間（1854～1859）前後のものである。すなわち19世紀中半が大半であり，『戸勝川絵図』のように古い史料でも，19世紀初頭にしかさかのぼることができないわけである。これに対して，チャシの構築年代は“以外と新しいもの”と言われても，17～18世紀のものが多いようである。新期火山灰との関係から，また出土遺物からその頃のチャシが多いことは事実である。さらに筆者は，「カムイチャシ」と呼んでいる地名としてのみ残るチャシや伝承のチャシなどは，前期段階のアイヌ文化の所産によるものが多いのではなかろうかという仮説をもっている[39]。すなわち，14～15世紀段階に「前期チャシ」が構築（設定）されたとするものである。これが16世紀段階の「中期チャシ」として「実在のチャシ」化していき，17～18世紀の軍事的色彩の濃い「後期チャシ」に発展したと考えるのである。この仮説に従うと，本論でも扱った「カムイチャシ」を含めて，チャシの年代は14，５世紀から18世紀までの400～500年の幅を有することになる。つまり，これだけの時間幅のものを本論では一括して扱ったこと，ならびにアイヌ・コタンも時間幅をもたせて考えた場合があること，チャシとコタンの対比に年代差があることなどの諸問題を有しているのである。これらを容認しつつもこのようなアプローチを試みたのは，「チャシ人口」としたものを考えてみたかったからである。アイヌ人口とチャシ構築の関係である。チャシ構築に要する時間の算定試案[40]も提出されているが，濠を掘削するのにきわめて条件が良い場合，小型のもので２，３人で１日，大型で30人で約２週間といわれる。このような構築時間を考える上でもチャシ人口を知る必要がある。

また，コタンが“有りし”場所はフシコ・コタン（古いコタン）を指しており，そこがコタンを作るのに適地であったことを示している。それらもすべて採録し，それらの地域に結果的にいくつのチャシコッが残ったのかという本論の論法は，400～500年の時間幅を有しているとはいえ，自然

村落の形成との関係で，また自然地理学的考察という意味においても有効であろうと考える。ともあれ，本論はアイヌ人口とチャシの関係を考える一試論であり，識者の御意見，御批判を待つ次第である。

末筆ながら，未公開史料の利用を快諾された松浦一雄氏ならびに日頃から武四郎史料について御教示をいただいている秋葉実氏に感謝する次第である。　(1983.2)

注

1) 後藤秀彦　1982　チャシの形態分類に関するメモ，浦幌町郷土博物館報告19
2) 河野広道　1958　網走市史先史時代篇，網走市史<上>（網走市）
3) 後藤秀彦　1980　チャシの橋状遺構について，浦幌町郷土博物館報告16
4) 小山田真弓　1980　ruyka 構造をもつチャシの機能について，北海道チャシ学会々報7
5) 後藤秀彦・石橋次雄　1980　礼文内神社チャシ跡について，十勝考古4
6) 宇田川洋　1980　アイヌ考古学（教育社）
7) 宇田川洋　1980　チャシの伝承，北海道の文化43
8) 上野佳也　1980　グシクとチャシの比較考察，考古学雑誌66-3
9) 小林和夫　1980　北海道のチャシ地名，日本城郭大系1
10) 宇田川洋　1980　北海道の地名に残るチャシ史料集成，史流21
11) 宇田川洋　1981　チャシ地名史料集成，北海道チャシ学会研究報告1
12) 本堂寿一　1977　石狩川流域のチャシコッ，石狩川中流域の先史遺跡（空知地方史研究協議会）
13) 宇田川洋　1979　チャシ分布の背景，北海道チャシ学会々報2
14) 宇田川洋　1982　天塩川筋のチャシコッの分布，北方科学調査報告3（筑波大学）
15) 萩中美枝　1980　アイヌ文学に現われるチャシ，日本城郭大系1
16) 河野常吉　1906　チャシ即ち蝦夷の砦，札幌博物学会々報1-1
17) 注14文献
18) 注14文献中の第1表で，空知郡と厚岸領のチャシ数が誤っていた。その後の訂正・追加も加えて本表を作成した。
19) この“夷家有りし”を戸口推定して合計に加えることには問題がある。“有りし”とは廃村にして他に移転したのが基本的であるから，他の現存コタンに数の増加があるはずである。しかしこれを加えたのは，そこがコタン地として適していたことから，より古い時代の記録がない時点に，コタンが存在した可能性があることを示すためである。ちなみに文化4年（1807）の北海道内のアイヌ人口は21,697人で，文政5年（1822）では21,768人であったものが，明治5年（1872）では15,275人となっている。約50年間で約6,000人が減少している（児玉作左衛門：1970　アイヌの分布と人口，アイヌ民族誌）。このことは高倉新一郎氏がいうところの，同化政策が積極的にとられ始めると「ただでも不安定な海岸部落は，まず，彼等を強制し縛りつけていた封建的な漁業制度（場所制度）が廃止されると解体しはじめ，一部は同化して全くその影を和人の中に没し，一部は和人に追われて再び河畔の部落へと帰った。しかしそれまでに大部分は伝染病で斃れていった」（高倉：1966　アイヌ部落の変遷，アイヌ研究）ことと関連するであろう。このような強制村落の形成期以前のアイヌ人口を知ることはできないが，50年間で6,000人の減少とまではいかないにしても，仮に100年間で6,000人の減少を考えると，18世紀初頭で28,000人ほどの人口を想定できるわけである。松浦武四郎当時の安政元年（1854）の北海道のアイヌ人口は16,136人といわれ，推定28,000人に比較すると約6割弱となっている。このことからも，本論で扱う武田四郎日誌からの戸口推定は，本来のアイヌ共同体の姿ではなく，崩壊後のものである。よって本論では，旧コタン名のものも合計数値に加えたわけである。

20)　注6・14文献

21) 山田秀三　1971　北海道の川の名（モレウ・ライブラリー）

22) 『置戸町史』（1957）の「通史」には置戸町川向に円山チャシ，同町勝山につつじが丘チャシの二つがのっているが，「先史時代史」を執筆した大場利夫氏のところにはみられない。ともに天然の要害の地としてチャシと誤認されたのであろう。実踏査の結果もチャシと認定すべき事実はなく，伝承もない。

23) この“昔”とは小林和夫氏によると，6，70年前と3，40年前の二説あるというが，後者の文化期（1804～1817）の幕府直轄の時を指したらしいとされる（小林：1975　安政3年の蝦夷地におけるコタンの分布，北方文化研究9）。ちなみに『廻浦日記』の“近年迄”とは「文政引渡し」の時を指し，文政5年（1822）のことといわれる。

24) 真貝四郎編　1954　津別町史（津別町）

25) 宇田川洋　1973　釧路川流域における集落，釧路川流域の遺跡（釧路川流域史研究会）

26) ただしこの16戸・59人も文章の解釈によっては「当時会所元え引移り」とも受けとれる。

27) 注7文献参照。また，宇田川洋編『アイヌ伝承と砦』（北海道出版企画センター1981）に伝承を収録しておいた。

28) 吉田巌　1955　日高アイヌとの交流，愛郷誌料（帯広市社会教育叢書1）

29) 泉靖一　1952　沙流アイヌの地縁集団における IWOR，民族学研究16-3・4

30) 本堂寿一　1977　東北地方におけるチャシ論史考，北奥古代文化9

31) 注6文献

32) 注21文献

33) 萱野茂　1973　わが沙流川，シシリムカのほとりに（日本観光文化研究所）

34) 知里真志保　1956　地名アイヌ語小辞典（楡書房）

35) 注29文献

36) 羽田野正隆　1981　十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷，北方文化研究14

37) 山田秀三　1981　陸別のルペシペ，北海道チャシ学会々報8

38) 北海道土木部河川課　1969　北海道河川一覧（注21文献所収のものから作成）この中の流域面積は支流の流域面積を含み，流路延長は河口または合流点から分水嶺までの当該河川だけの延長を測定したものとされる。

39) 注6文献

40) 宮塚義人　1980　チャシ構築に必要な時間，日本城郭大系1